同窓会誌

第8号

沼津工業高等専門学校同窓会

昭和53年

目　　次

偶　　感 …… 2
会誌第8号によせて …… 5
78　年　秋 …… 6
事務長からのお知らせ …… 7
定年退官祝賀会 …… 8
退官教官のたより …… 9
職場だより
　藤沢薬品・リコー …… 11
同窓会誌によせて …… 13
海外の印象 …… 15
近 況 報 告 …… 27
第16回東海地区高専大会報告 …… 29
新入理事歓迎球技大会 …… 31
慶 弔 報 告 …… 32
告　知　板 …… 33
編 集 後 記 …… 35

偶　　感

名誉会長　樋　口　泉

1. 教養について

最近直接または間接に２～３の会社の幹部級の方の意見を聞く機会があった 。それぞれ社内の高専卒業生の意識を調べた結果、専門知識では大学卒に劣らないと誇りをもっているが、一般教養が足りないとコンプレックスを持つ人が多いとのことであった。第三者が評価することは自由であるが、本人自らが教養不足とコンプレックスを持つことは意外な感じがした。恐らく在学中から専門科目の授業時間数は大学に比して劣らないが、一般科目の授業時間数は不足であると聞かされていたことが原因ではないかと思われる。

本誌第４号で述べたように高校の全授業時間数と大学の教養部における一般教養科目の授業時間数の和に比較して高専の一般科目の時間数は平均して20数％少ないことは事実である。然し人間の教養が学生時代の授業時間数に比例するかの如く考えること、又それにコンプレックスを持つ人が少数でもいることは正常とは言えないのではあるまいか。

本誌第５号で教育学者永井元文相の高専教育に関する評価を紹介したことがある。氏によると人間の真の教養は頭だけで学習した抽象的な知識の枠の広さではなく、体験を通して学び形成したものということになる。言葉を変えると社会の現実を正当に理解し、それに対処する人格的なポテンシャルとでも言えるのであろうか。教養を高めるには広い知識は無駄とは言われないが、体験に裏付けされない、したがっていわゆる身につかない抽象的知識の集積では、かえって有害にすらなることが少なくない。例えば観念（知識）過剰で有効適切な決断と実行のできない人間になってはいわゆるディレタントではあっても社会的活動はできなくなる。現在ではこのような物知りも教養人といわれることが多いが、決して賞賛だけの言葉ではないと思う。

次に教養という言葉に、外国語や、数学等の専門基礎知識を含んでいるとすれば、どうであろうか。外国語、数学等の授業時間数の比較においても、前節と同様に高専教育では若干少ない。しかし前にも述べたことがあるが大学生の外国語学力は少数者を除き、「入学時がピークであって、専門課程に入るころには大部低下している」というのが多くの大学教官の印象であって、ここでも能力は授業時間数には比例していないといえると思う。大学のために一言弁護すると優秀な大学生の場合、入試のための意欲的な学習による、学力の向上と、勉学を通して自然に養成される忍耐力、自己抑制力等々の人格的長所は無視することができないであろうし、これらが将来発展のポテンシャルになることは否定できないが、惜しむらくは多くの受験者が大学合格のためだけに学習していることは、真の学習にすらなっていないし、人間形成の歪にさえなってしまう。これが試験地獄といわれ、社会問題になるゆえんであろう。

入学試験がないことは高専教育の大きな特徴であり、学習に、運動に、更に余裕があれば文化部活動を通して、円満な人間形成に努むる５ヶ年の充実した学生生活を送ってもらうことが高専教育の理想である。そして多くの卒業生諸君は学校のこの期待に沿っていると思う。その証拠には本誌第４号

で述べたように卒業生に対する社会的評価は充分高いものがあるし、静大編入生の多くは、教官から高い評価を受けている。 ただ入試のような強い incentive、刺激がないために、 一部の学生が安易な学園生活に陥ることは現実的には高専の泣き所ともいえる。これをいかにして克服するかが、高専教育の大切な課題である。

さて本題にもどって自己の未熟さ、弱点を反省することは美徳ではあっても欠点ではないが、コンプレックスを抱くことは健全ではない。足らないところは専門的知識でも、教養の面でも生涯に亘って拡充し、自己開発を続けることは重要なことであって、それが出来るか否かは個人個人の将来を決定していく最大の要件である。

2. 卒業証書病について

人間の能力は学生時代の授業時間数に依存しないことを縷々述べてきた。高等教育において、一般科目ばかりではなく専門科目でも、何をどこまで教授するかということはカリキュラム編成上の大きな問題である。多ければ多い程良いというものではない。現在の高校、大学のそれに比較して高専教育では少ないといっても、少ないことが良いか、あるいは悪いかということから論議しなければならない。将来必要になるであろうことを予想してすべて講義しようとすればおそらく10年間講義しても充分とは言えないかもしれないし、３年間でも充分であると結論することも可能になる。実際問題として、いわゆる新制大学では、戦前の旧制よりは平均して１ヶ年短縮されているし、社会状況により国々の実態によって異っているのが現実である。多くの専門家が、それぞれの専門分野の第一線の学問水準に到達するよう講義をし、到達度をテストしたら多くの学生諸君にとっては過重負担になることは明らかなことである。更に理工の学問、技術の世界では絶えず進歩発展していくから、際限なしとも言えることになる。したがって学校としては、学生諸君が将来必要になったときに、自から学ぶ基礎を与え、未知の世界に挑戦する意欲の強い人間形成に重点を置かざるをえなくなる。学生諸君にとっては "To learn how to learn" すなわち "如何にして学ぶかを学ぶ" こと、そして現実を体験しながら創造的に自ら学ぶことが大切なことになる。

最近Ｒ．Ｐ．ドーア教授の "Diploma disease" の訳本を通読した。直訳すると "卒業証書病" 意訳された訳名は "学歴社会―新しい文明病" （岩波書店発行）である。英国、日本、スリランカ、ケニア等を例にして、いわゆる先進国でも後発国でも、程度の差はあるが卒業証書病がまんえんし、更に一層増幅する傾向にあることを具体的に示し、この病気は、民主主義国では近代化に伴って、抑制することの困難な新しい文明病であることを詳述している。そしてこれを矯正するには日本等では中等教育を終った段階で学校を離れて就職等により社会生活を体験させ、しかる後に目的意識を明確にした適応者に高等教育を用意する制度に変えることを提案している。

ドーア教授も身体的、精神的成長期である20才前後までに自己開発、人間形成のための学校教育を全面的否定しているのではなく、私の言葉で表現すると知的好奇心学問への愛着心の薄い、学習の難関を克服する強固な意欲、忍耐力の不足な学生がやたらに多くなり、これらの学生は就職を有利にするための方便としての卒業証書取得のみを主目的にしているので、学校が本来もっている教育的機能を破壊していることへの嘆きであり、一つの破壊防止法の提案のようにも思われる。

学校は直接的に社会風潮をかえることは出来ず、逆に社会的要請が学校自体を変えていくことを防ぐことは困難である。ただ私の見るところドーア教授の試案は現在の日本の高専制度が、部分的ではあるが先取りしているように思うのであるが如何であろうか。米国でも大学が減小し、コミュニテイカレッジ（日本の短大に相当する。）が隆盛になりつつあるのも同じ方向のように思う。

卒業生諸君も“新しい文明病”に侵されることなく、日日自己拡充に勉めて、将来の発展を期して頂きたいと思う。

会誌第８号によせて

会長　望　月　俊　和

昭和53年度の同窓会が活動を始めてから半年、仕事も一段落して、ほっとしている今日この頃です。

同窓会も創設以来12年を数え、諸先輩・教職員の方々の御尽力により、草と岩の大地に真新らしいレールが敷設されてきました。これからは、新しいレールを追加していくと同時に、徐々に大きくなっていく組織に合わせて、軌道を修正していかなければなりません。現在会員数は約1,600人、10年後には3,200人になります。組織が大きくなればなる程、発生する“ひずみ”の数は多くなります。同窓会組織の“ひずみ”とは、①同窓会に対する無関心者の増加、②会員全部の動静を把握できない為に生じる、一部会員の切り捨て、③財政的困窮等です。

別項で詳しく説明がありますが、今まで毎年おこなっていました総会と、会誌発行を今年度から、隔年におこなうことになりました。財政面、理事の負担および毎年おこなった場合の総会・同窓会誌の密度等を考えますと、本年あたりから踏み切ってもよいのではないかとの判断をしたのです。しかし、会員相互の近況の確認・連絡という事を考慮しますと、空白の年があってはなりません。そこで会誌の発行と総会を交互におこない、さらに、修正名簿は毎年発行することにしました。

これで、いくらかの“ひずみ”は取り除かれました。しかし最も重要な“ひずみ”である①項、②項はまだ残っています。この“ひずみ”を取り除き、同窓会の目的である「会員相互の連絡・親睦と母校との連絡をはかる」為には、どうしても、支部組織が必要になります。現時点においても、同窓会は沼津近郊在住の会員だけの為というような錯覚に陥いりがちな状況ですので、５年後・10年後には、さらにその傾向が強まることと思われます。そうなれば、最早、沼津支部としての性格の方が強くなってしまいます。

会員数が増えれば増える程、各会員と同窓会とのパイプは細くなり、もともと長いパイプは、やがてつまってしまいます。支部組織は、そのように細くつまったパイプを太くさらに短かくする効果があると思います。

現在支部組織のある所は、愛知県支部と浜松支部です。さらに小田原地区でも、まとまって活動しているという話を聞いています。地域別にみると、九州地区（会員数９名）、中国・四国地区（会員数20名）、関西地区（会員数 164名）、関東地区（会員数 447名）、東北・北海道地区（会員数13名）に各々支部があってもよいのではないかと思われます。又、人数でみると、大阪地区・東京地区は支部が必要な会員数に達していると思われます。各地区では、組織化された動きはないかもしれませんが、有志が集まって親睦会などをおこなっているのではないでしょうか。そのような集まりを大きく広げて、組織化してみませんか。「全国に散らばった会員との連絡が確実におこなえる為の支部組織を充実させていく。」この事が、今後の同窓会の課題であると思われます。（注）会員数の部分で使用した数字は10期生までのものです。

〒411　三島市清住町８—22

78年秋

副会長　筒　井　正　文

去年 '77 年の秋に、同窓会副会長をやれというどこからかの指令で、私は2年間の期限付役員となった。同窓会の人材不足は目に余るものがあり、これはぼくが冗談を言わなかったからだと思う。とにかく、人材不足により私のところへ役目がまわって来た訳です。

この作文を書く私は、小企業に勤めるサラリーマン、金型設計、営業、経理が仕事で、なんとか毎日を送っている。Uターン組のため静岡へもどると同時に理事となり現在に至る。理事会への出席率は「良」と自分では思っている。

この同窓会も、いくつかの問題点をかかえている。例えば

メンバーの固定化、固定化が悪いということではないが、理事への個人的負担が集中している。

各理事の出席の低調なこと。ある卒業年度では理事の出席がないため、住所録などの管理が滞っている。又沼津近郊に卒業生のいないクラスもある。

財政的な問題。特に長期的な資金運営について不安がある。自民党長期政権によるインフレは、会の運営をあやうくする。会費未納者が多く残っていることも解決しなければならない。

以上のような理由をも含めて、理事会では会の運営を息の長いものにしてゆくとの考えから、現在まで毎年行なわれて来た総会の開催を隔年とする方針を立てた。この点については望月会長の説明の通りです。このことにより、上記の問題のいくらかは改善されることと思う。他に現在の希望としては、同窓会用の事務室が欲しいところですが、将来への夢としておきましょう。

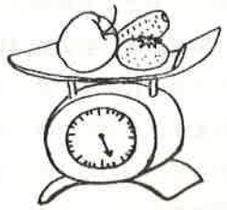
理事会の様子については、本号にも理事からの報告がありますが、各理事の貴重な時間をさいての協力には、頭の下がる思いです。

インスタントラーメン1ケで夜遅くまでの仕事については、後半の報告にもある通りで、出席者はずいぶんわびしい思いをしているかも知れません。改善の余地があります。

実は、この原稿が一番遅れまして、編集の方には迷惑をかけました。以下編集後記風になります。

今回の会誌は、内容充実、会員の皆様には大いに楽しんでいただけることと思います。M12平松君の近況報告には、白井前会長の異議申し立てがありましたが、最後にフィクションであるとの断り書きがありますので、残念ながら白井さんには遅刻常習者になっていただきます。もう書くことがなくなりました。編集委員長。このくらいでいいですか？

田方郡函南町肥田943



事務長からのお知らせ

事務長　小　川　吉　晴

紹介がまだでしたのでこの紙面を借りて簡単に自己紹介しておきます。名前は上記の通りです。電気科五期の卒業で、現在地元の明電舎に勤務し電力用変圧器の技術的な事を担当しています。学生時代は真面目な学生だったけれども二十すぎれば唯の人で、元体操部でしたが現在は運動不足でベルトの長さを気にし始めています。その他、無芸小食の独身貴族とだけ書いておきます。同窓会に関しては、47年からの長いつきあいですが、人材不足の為かとうとう役職になってしまいました。すでに半年経ってしまいましたが、以前と同様のんびりやっています。

今年度の行事について

今年度より、同窓会の主要行事である総会及び同窓会誌の発行を一年おきとする事になりました。この件については、前三役の時から話がでており、下記の様な理由により、学校側との話し合い、理事会の決定を通じて、今年度の新三役から実施することにしました。実施方法はまず今年度は会誌の発行を行ない、来年度は総会を開催することにしました。

理由

1.　長期的視野に立って

沼津高専同窓会は、一時停滞期があったにせよ、母校創立十周年を契機として順調に発展して来ており、すでに定着期に入っているといえる。この発展を支えてきたものは学校側の協力、会員諸兄の御支援もさることながら、月2回程度の理事会に無報酬で参加し、カップヌードルひとつで10〜11時頃まで会誌の発行や総会の準備におわれていた理事各位の働きによるものが大きい。しかしながら、これからの長い将来を考えると、現在の活動を多少縮小しても、息の長い活動を心掛けていくべきであるという意見が多い。

2.　会員数の増加と財源問題

現在、会員数は約1,700名であり、数年後には2千名を越えることになる。しかし一方では、同窓会の経費は毎年新会員の終身会費でまかなっており、会員の自然増により、近い将来同窓会の運営に支障を来たす事が考えられる。（幸い現在は物価が安定しており49年の会費値上げの時の様なせっぱつまった状態ではないが）しかしながら、終身会費の値上げでこれを賄うことは、新会員の負担のみ増加させる事になるので極力おさえたい。従って、5年に一度程度の会員名薄の発行の為の財源を確保すると、各年度の支出は限られてしまう。

3.　総会及び会誌の現状

今までの一年毎に行なっている総会では特に卒業年度の古い会員の集りが悪く、またこのことが次の年の出席率を低下させるという悪循環になっている。総会が新会員の卒業後の初めての集まりであるという意義は大きいけれども、より多くの会員に出席してもらい、昔話に花を咲かせるなり、近況を語り合ってもらいたいと願うものである。

また会誌においても、毎年原稿を募集しているにもかかわらず一般会員の投稿によるものは皆無であり、理事の依頼により原稿を集めている関係で執筆者が同一となってきている。

今年度の総会を心持ちにしていた新会員の方々やひさしぶりに出席しようと考えていた会員諸氏には、まことに申し訳なく思いますが、上記の様な事情を御理解いたくだとともに御容赦願います。

昭和53年度業務計画及び中間報告

5月13日	新旧三役引き継ぎ会
6月3日	学校長との懇談会
6月10日	第1回三役打合せ会
6月22日	三役、理事、顧問親睦会
6月30日	第1回理事会（業務計画）
7月6日	第2回三役打合せ会
7月7日	第2回理事会
7月12日	第3回三役打合せ会
7月21日	第3回理事会
8月4日	第4回理事会
8月12日	三役、会誌編集委員長打合せ会
8月20日	理事親睦球技大会
8月22日	第5回理事会
9月5日	第6回理事会
10月	会誌発行
10月	会員名簿追補
3月	卒業予定者への説明
3月	卒業式

定年退官祝賀会

報　告

在学中お世話になった川井晴雄教授が、この春をもって定年退官されるに当たり、４月１日ひしや三島プラザホテルにて謝恩送別会を催しました。

当日は、卒研関係者や近在の卒業生の有志20余名が出席、長年の労をねぎらい、今後の御活躍を祈って散会しました。

なお、先生は非常勤講師として引続き母校で週一回講義をされます。

新住所　東京都目黒区洗足２―13―17
ＴＥＬ〈03〉793―6275

川松先生を送る

Ｃ１大沢、Ｃ２中村、Ｃ３納谷
Ｃ４山田、Ｃ５塩川、Ｃ６渡辺
Ｃ７渡辺

工業化学科の古参川松先生が今年の３月をもって定年退官されました。川松先生は工業化学科の設立と同時の就任であり、12年もの長い間クラス担任や学科主任、就職担当、同窓会顧問など我々のため御尽力をつくされました。

先生は一見水戸黄門を思わせる風貌で、親しみやすく多くの学生から慕われていました。毎日健康のため三島の官舎から高専まで歩いて通われていた姿を今でも思い出します。ひとつ先生の試験は変っていてよく百数十満点のテストがあり、細かく２時間もの内容で苦しめられた？　ことなど思い出します。先に退官された村松先生とはよく御一緒であられ、失礼ではあったが剛の村松、柔の川松などと学生の時対比したことなどなつかしい。

そんな先生の労をねぎらい、御尽力に報いるため、我々工業化学科卒業生有志が集まり「川村先生謝恩会」と題する送別の会を４月15日（土）12時より三島田代グリルにて開催しました。先生の人望は厚く40余名もの卒業生が集まり、誠に盛大に催すことができ喜ばしい限りでありました。

先生は退官後も週に一度高専に非常勤講師として来られるとのことであります。

最後に、これからも御健康であり、ますます御活躍されることをお祈り申し上げます。

川松先生住所
〒185　東京都国分寺市内藤２丁目39―13
ＴＥＬ〈0525〉72―7694

退官教官のたより

同窓会の発展を祈って

川　井　晴　雄

11年に亘る沼津高専の務めを終えて４月４日に東京のわが家へ戻って来ましたが、その当座は何となく落着かなく気の抜けたような状態でした。考えてみると、工業人として30年、教師として10年余の生活にピリオドを打ち、一瞬にして時間に縛られない環境におかれたのですから、何かより所のない頼りない気持になったのも当然かも知れません。

然し、一面、解放感が自分のまわりに充満しているという気持を強くしたことも事実です。暇になったらああしよう、こうしようと考えていたことを、ボツボツ実行に移しつつある昨今ですが、なかなか軌道に乗りません。

いずれにしろ、長い間の生活慣習を急に変えることは困難なものですが、幸いに週１回沼津高専に出かける機会を与えて頂きましたし、また小生の先輩の御世話でさる大学の非常勤講師の仕事をしておりますので、４月中旬から７月中旬までの３箇月間は今までとさして変りのない毎日でした。今は夏休みですから、ここしばらくは全くフリーな生活が続くことになります。

さて、わが沼津高専同窓会も、今年第12期生を受け入れ正に一人前になったといえましょう。初期の卒業生諸君は既に職場の責任ある地位を占めるようになり、会員の結束もいよいよ強固になって来たことを感じております。小生も、沼津高専在職時は10年近くに亘り電気の学生の就職や進学の面倒を見て来ましたので、退職後も卒業生諸君の動向に深い関心を持っています。特に就職に際し、いいにつけ悪いにつけ受け入側の反応が強かった時は印象が深く、何年経っても忘れることがありません。今でも、彼はその後うまくやっているだろうか、元気でいるだろうかと、一人で憶いを走らせたりしています。

同窓生諸君、どうか各自が選んだ道でベストを尽くし悔いのない毎日を送って下さい。

若い時代の動向が、諸君の将来を決定的なものにすることをお忘れなく。そして諸君が社会人として立派に大成することを念願している退役老教師がいることも、またお忘れなく。　53年８月

高専生活を顧みて

川　松　俊　治

今年は殊の外厳しい暑さが続いておりますが、同窓会の皆さんには益々元気で、それぞれの職場で御活躍のことと思います。

さて私の退官に当りましては同窓会より多額の祝い金を頂戴いたし、皆様の御芳情に対して心から厚く御礼を申します。また工業化学科卒業生の諸君には私の退官を記念して盛大な送別会をしていただき、また記念品としてまことにふさわしい翁の人形を頂戴いたし、誠に有難たく厚く御礼申します。このような送別会は生涯初めての経験であり、よくぞ教師になりにけりの喜びを味わいました。できれば翁の笑顔の如き老年をむかえるまで元気に長生きしたいものと願っております。

早いもので沼津を去ってから既に４ヶ月有余になりますが、この頃やっと現在の生活に慣れて参りました。毎週金曜日に沼津高専の機械科２年の一般化学の授業を担当するかたわら、東光という弱電部品メーカーにも有機材料関係の顧問として勤めております。

高専時代をふりかえってみますと、まず最初沼津高専に奉職が内定しました３月のある日、学校を訪れました時、当時工業化学科の建設を担当しておられました渋谷先生から、実験室のガス栓の位置を決めたいから相談にのってほしいとの話があり、作業を進めているうちに、何しろ数が多いのでいつの間にか７時頃になってしまいました。故土井校長はその作業のすむまで待って下さって、三島の駅までわざわざ送って下さいました。その日のことがいまでも昨日のことのように目に浮んで参ります。それから工業化学科の建物のうち、クレーンは土井

校長が工業化学科はボンベを多く使うから階段の上げ降ろしは危険だから是非つけるようにとの御指示によるものであり、学校実験室の２階以上のベランダは実験室の非常口をどこにつけようかと思案していたとき、村松先生の御提案により実現したものであります。

さて、私は会社の30年にわたる研究所生活から殆んど何の心準備もないままに教師となり、随分とまどいました。工業化学科の新設と同時であり、その建設に村松先生と力を合わせて取りくみ、授業の方は工業化学科１年の実験と電気科１年の一般化学、機械科５年の非金属材料を担当しました。化学関係はいろいろ渋谷先生の御指導を得ることができ大変有難たく感じました。

1957年、ソ連がアメリカにさきがけてスプートニク１号の打上げに成功したのに衝撃を受け、アメリカでは従来の教育方法を改めて、創造性を養う教育をしなければいけないというので、化学方面では高校程度の化学教育のためノーベル賞受賞者シーボルクが委員長となり、大学・高校の教師が多数集まり討議の結果、 chems 化学という教育方法が打ち出され、成果はこれを高校で実施してみて、改めるべきは改めて次第に完成されていったものとのことです。その後も少しずつ改正されていたようですが、日本でも訳書が発行され、高専でも一般化学の教科書として採用した学校もありますが、沼津では学生の負担の重さを考え、以来化学実験だけを採用し、本文は参考書として希望者に買わせました。

入門実験はケムスによってきましたが、２回生からは幸いケムス化学を日本の高校向きに作ったと考えられる化学Ｂが出版されましたので、数年にわたりこれが教科書として採用されてきました。しかし、文部省の指導方針変更のためむしろ改悪された教科書を用いることになり、学生諸君はこのため随分苦しんだと思います。これは人間の知能の発達段階を無視したもので、あまりにも理論的基礎を急いで教えようとしたためと考えます。やはり、化学入門としては身近な実生活と関連させながら理論との統一をはかり、楽しく理解できるよう進めてゆくのが好ましいと思います。

その他主として有機化学をずっと担当しましたが、初め中崎先生の“有機化学”を教科書としましたが、これは昔大学で習ったとは内容が全く違っており、会社でも高分子と関連して重合は少し勉強しましたが、新しい有機化学とは疎遠でしたので、最初の間はこれを理解し伝えるのに精一杯で、最初の頃の学生諸君はきっと解り難い点が多かったことと申し訳けなく思っております。

機械科５年（時には４年）の非金属材料は12年間ずっと担当しましたが適当な教科書もなく、最初のプリントを作るのに随分苦労しました。初めのうちは随分欲ばり盛沢山となりましたが、次第に化学的なところは削り、枝も葉も削り、代りに新しいトピックスを所々加えたりして一応努力しましたが、熱心に聞いてくれる学生諸君は誠に少なく頭痛の種でした。しかし、ゴム弾性の授業のときのように皆が熱心に教壇に顔を向けて、教室に気持よい雰囲気が流れた授業の後は何とも言えず楽しい気持になりました。授業中時々質問をいたしましたが、多くは忘れました、解りませんとの答えが返ってきて、概して物性論的思考の乏しいのを感じました。材料に関係する人に、プリントが少しでも役立てばと思っております。

この授業に関連して教師にも演技力が大変大事だと感じました。いつかテレビで宮城教育大の入試の課目に演技力があり、授業にも取り入れられ、学生がとんだり、はねたりしている光景が映し出されておりました。人の注意をひきつけるには、内容もさることながら演技力が非常に重大な役目をすることは、同じ内容の芝居でも、名優の演技と大根役者のそれを考えればよく解ります。東洋でも控え目を美徳とする風習がありますが、地球が小さくなり、国際人が要求される今日、いつも控え目では社会人として不適格となりかねません。日立にいた頃は不言実行ではなく有言実行を教育されましたが、つい実行できず、落第生に終りましたが、諸君は誰も彼もがこの点は立派な優等生になってほしいと思います。

とりとめのないことを書きましたが、卒業生諸君の御健康と御活躍を祈って筆をとめます。

職　場　だ　よ　り

藤沢薬品紹介

C1　市　川　三　郎

薬品会社と呼ばれる会社は、全国に中小合わせて約二千社以上あると言われています。でも、皆さんが知っている薬品会社を一寸挙げてみれば、『飲んでますか？』の武田薬品、ミュージックフェアーの塩野義製薬、オロナミンＣの大塚製薬、その他大正製薬、三共製薬、田辺製薬位ではないでしょうか。その中で、『藤沢薬品？ああ、藤沢市にある会社か』と言われるのが、私が勤めている会社です。本当は藤沢市にないのですが……。

本社は大阪、工場は大阪・富士・名古屋・高岡に有り私は富士工場に勤務しています。ここは、抗生物質の一貫工場であり、醗酵、合成（製薬）、 製剤及び包装工場が有ります。この工場に、沼津高専機械科三期、矢崎さんを筆頭に、機械５人、電気２人、化学５人の計12人が勤めています。他の高専生（化学）も４人居りますが、主力は沼津高専生です。

私達高専生は、この工場では、現場か、それを助けるスタッフ部門に全員従事しております。しかし、ここは女子従業員が圧倒的に多く（最も私の部門では、ほとんどおりませんが）その為に平均年齢が約28歳と非常に若く、高専生も抵抗なく職場に溶け込んで行けた様です。今では新入社員がどこへ入って来ても、必ず高専の先輩がいると思います。従って職場の中心となる人も多く、周囲から勧められ、組合活動の中心として参画している人もいます。こんな人達と一緒に高専会を作り、会員の親睦をはかっています。主な活動としては、新入社員の歓迎会、忘年会だけですが、日頃から、公私に渡り行き来し、今では先輩後輩の区別がない程、親密な付き合いをしております。

まだまだ高専生は少数ですので、現実には何もできませんが、毎年毎年一人でも多くの高専生に入社してもらい、充実した藤沢の高専会を作って行く様、会員一同頑張っています。

リコーだより

M1　中　村　　馨

㈱リコー沼津事業所に５人の沼津高専ＯＢがいますので、近況をお知らせします。

㈱リコーは、複写機、ファクシミリ、ミニコン等の事務機械関係の総合メーカーです。沼津事業所では、感光紙・複写用紙・複写用現像液剤等を製造しており、製紙工場と化学工場を一緒にした様な感じの工場です。最近の社内の動向を見ますと、業界の競争が激しくなるのに従って、新製品開発生産工程の合理化によるコストダウン等、又工場内外の環境、安全の整備に力が入れられています。

ＯＢ５人の内４人が機械科出身で、いずれも生産技術関係の仕事、１人が化学科出身（女性）で環境、安全関係の仕事をやっています。どこの会社にも、そこの会社のカラーというものがあると思いますが、リコーで仕事をしていて感ずるのは、全体的に見ると労働条件は世間並の水準に行っていると思いますが、個々の仕事の進め方を見るとハードスケジュールで、頑張らざるを得ない様なケースが多々あり、頭脳よりも体力の勝負かなと考えることがあります。その為かどうかは解りませんが、ＯＢ諸君の婚期が遅かったり、浮いた話しを少ししか聞かなかったりするのが気掛りです。しかし乍ら、仕事を

進めるに当っては、責任と権限が適度に与えられるので個人の裁量の巾が比較的広く、仕事の面白味があると思います。

さて、添付写真でＯＢ諸君を紹介しておきます。これは、某日社内で撮ったものですが、右側より年齢の多い順に並んでいます。左端の顔が老けて見えるので逆に見えるかも知れません。

一番右の人は、42年卒で身心共に中年域に入った様で疲れが目立っている様です。

二番目は45年卒の池田君。どちらかと言うと道を誤った方で産業人よりも、自由業向き、朝がまるでだめだが夜に強い人。

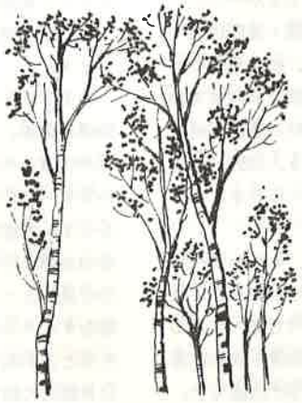
三番目は46年卒の佐野君。女嫌いの感が強く、その分他の遊びに凝り易い。

四番目は48年卒の旧姓山本、現姓吾妻女史。大変な張り切りウーマンで、旦那を可成りしごいている様子。

五番目は49年卒の飯田君。顔は不細工だが心の優しい人、粘り強い人。

池田君、佐野君、飯田君の３人が独身貴族の身分ですが、前者２名はそろそろ身を固めた方が良い頃。適当な女性がいましたら、本人又は、中村迄紹介下さい。

以上の５名でリコーを支えるべく日夜頑張っています。自己紹介だけで終ってしまいますが、卒業生諸君の御活躍と御健康を御祈り致します。



同窓会誌に寄せて

高専生活17年

岡　田　泰　栄

沼津高専が創設された昭和37年から勤務して17年、いよいよ今年で最後の１年を終ろうとしている。この間同窓生諸君と、授業の有無はともかくとして、フルコースで５年間ずつの生活を共にする光栄に浴して、もちろん、私の生涯で最良であった年月が、思い出深く偲ばれる。

創立当初のことについては、前の“高専一昔”という原稿に書いたことがあったが、その後も、その時その時の楽しい思い出があって、どの時代もなつかしい。60才を過ぎた頃、少しくたびれて、「長いなあ」と停年が待ち遠しかったこともあるが、最後の１年になってみると別れ難い気分がして、毎日毎日が大切に思われる。

17年の生活で、一番の仕事は、数学の勉強であり、統計の講義である。居眠りもせず、あくびもせず、よく聞いてくれたものである。我田引水的な効能を並べて、新しく開拓する高専数学の分野を、自分なりの方向で進めて来たが、卒業後の諸君から見て、基礎学科としての存在価値が認められ、実生活の何らかの面でお役に立っているか、心配である。

自分の記憶では、これまでの卒業式祝賀会や、同窓会総会には、全回とも出席している。そのような時に、古顔の一人として、挨拶でもさせられはしないかと、ビクビクしながら口上を考えたこともあったが、司会者の好意で、一回も指名されたことはない。それほど特色のない存在であったけれど、まあまあと大過なく送ってこられたのは、周囲の方々の温情のたまものである。

童顔だった卒業生が、一年一年と見違えるように立派になって、各方面にそれぞれ活躍していく姿を見るにつけ、気は若いつもりでも体力的な衰えは蔽い切れず、マイナスの相関々係が起るのも、新旧交代の現在、嬉しい現われである。何よりも健康、そして自信を持って、限りない可能性を含む前途に邁進して、高専健児の意気を高らかに示してもらいたい。

私も、のんびりとではあるが、心豊かな老後を送りたいと思っている。時々は、ぜひ遊びに来て欲しい。

改新された電気工学科

電気工学科主任　佐　々　木　俊　夫

昭和53年度より川井前主任の後を引継いで、学科主任になりました。今まで文部省や、国専協（国立高等専門学校長協会）の専門委員として電気工学科のカリキュラム改善に尽力し、省令による設置基準も改正し、昨年度入学生から新制度に切り替られる運びとなりましたので、今後は本校の新カリキュラム適応に専心するつもりです。

第一表は昭和39年度の沼津高専要覧より転写したもので、電気工学科専門科目の授業科目とその総授業時間数です。35時間で割れば各科目毎の単位数になります。そして殆んどの高専がこのカリキュラム表により、学年毎の配当がいくらか違うだけで、まったく同じ科目で、同じ授業時間で実施されていた事は同窓会の大半の諸志は御存じのことと思います。

このように学生選択も学校選択も出来ない、固定された授業では、学校の特色化も、学生からの魅力も薄れ勝であり、社会からもハードトレーニングのそしりを受け

第１表　専　門　科　目（電気工学科）

授業科目	総時間数	授業科目	総時間数
応用数学	140	電気機械	210
応用物理・同実験	105	電気材料	140
図学	70	高電圧工学	70
電気磁気学・同実験	105	電気製図	280
交流理論	140	電気設計	140
電気計測	105	電気工学実験	770
電子工学	105	卒業研究	210
回路論	70	増加科目	700
機械工学概論	280	計	3,640

（昭和39年度）

第2表　電　気　工　学　科

	授業科目	単位数	備考
必修	応用数学	4	
	応用物理	4	
	電気磁気学Ⅰ	3	
	電気磁気学Ⅱ	2	
	回路理論	7	
	電気計測	2	
	図学・製図	5	
	気体電子工学	3	
	電気工学実験実習	18	
	電気応用	2	
	自動制御	2	
	プログラム演習	2	
	電子計算機工学Ⅰ	2	
	電子計算機工学Ⅱ	2	
	情報理論	1	
	高電圧工学	1	
	生産工学	1	
	機械工学概論	6	上段は電力コースを選択した場合に履修
	電気機器	5	
	電気材料	3	下段は電子コースを選択した場合に履修
	電子回路	2	上段は電力コースを選択した場合に履修
	通信工学	2	
	数値解析	3	下段は電子コースを選択した場合に履修
	電気特論	1	この科目は電子コースを選択した場合に履修しなければならない。
	マイクロ波工学	1	
	卒業研究	0	
		2	
		7	
選択	電気材料	1	電子コース
	電子回路	2	
	電力工学通論	2	電力コース・電力コースのいずれかを選択し、履修しなければならない。
	固体電子工学	2	
	電気法規	1	電子コース
	電気設計	2	
	発変電工学	2	
	電力系統工学	2	
必修科目合計		87 88	上段は電力コース
選択科目合計		7 7	下段は電子コース
履修科目合計		94 95	
開設科目合計		102	

易いので、新カリキュラムへの移向が考えられたわけです。第二表は昭和52年度の要覧より部分複写したものです。新基準により40単位程度が省令で固定され、その他は学校選択、学生選択制度にまかせられ、学校の実情により、特色化を図り、本校では２コース制を取り40単位程度の学校選択を採用しました。今後更に特色化を進めより内容の充実、魅力化に努力を続けたいと電気工学科職員一同がんばっております。

わが喜びに友は舞う

工業化学科主任　米　崎　　茂

同窓会誌に何か書いて下さいと原稿用紙を持参されたのは柳下先生であったので、その時はついスンナリと受取ってしまった。期限が迫ったので御約束だけは果さなければならないと思案して筆をとることにした。

そこで想い浮んだことは、卒業生と学校との関係をどのように認識されているのだろうか？　ということである。日頃考えていることを書いて御批判を仰ぎたい。

人間一度び社会に出てからは、信頼と尊敬の置ける人との交りほど楽しいものはないのではなかろうかと、私はつねづね信じているし、時々過去を振り返って自分の周囲を眺めてみると、先輩、後輩を含めて多くの友人との交りに於て、自分の人生を幸福なものにしていただいていることを有難く思っている。これは外国人との交りを含めても然りである。

卒業生諸君に於かれても「友情」の尊さ、有難さを、学生時代の寮生活などを通じて、既に大多数の人は体得されていることであろう。

このことは我々年輩の者に於ても同様である。

「友の憂いに我は泣き、わが喜びに友は舞う」と毎夜のように歌ったデカンショ節と共にこの言葉は、旧制高校時代の寮生活の尊い想出としていつまでも脳裏に残って居り、人生の理想像が無意識のうちに画かれ、わが人生哲学を形成する上に少なからぬ影響を及ぼしていることは否定出来ない。

この点に関しては、高専も全寮制であり、又昔も今も変りなく、労農貧富を同わず、同じつくりの寮の部屋で起居し、同じ物を食べて、人生論、恋愛論などに花を咲かせ、又将来の人生行路についても友人や恩師と共に抱負を語り合ったであろう。昔と異るところといえば、戦争と軍人と国の将来についての論義が無いこと位いである。国の将来についての論義の無いことは正に憂うべきことではあるが。

我々の若かりし頃には自己の生命を超越しながら、それぞれが人生を模索し、自分で考え、自ら決断して行動した。

本校の卒業生諸君もまた、このような寮生活の尊い体験をもって社会に出て大いに活躍しておられるわけである。そして諸君は好むと好まざるに拘らず、沼津高専卒業生であり、人からもそのように見られている。従って沼津高専が更に立派な学校となって欲しいと希望しているし、又続いて立派な人材が出て欲しいと願うのは当然であり、後輩も又先輩諸君の活躍と発展に常に見守り、又心から成功を祈っているにちがいない。

君たちがやがて社会に対して立派に貢献することが出来て、自ら大いに満足し、大きな喜びを得られた時には恩師や同窓生すべてが君の喜びになり、共に酔い、又共に舞うことが出来るにちがいない。その日の一日も早く来ることを祈ると共に、又その日の来るまでは、十分自重され、大いに努力されるよう切望する次第である。

海　外　の　印　象

エリート教育の実像を求めて
イートンカレッジ訪問記

大　沼　栄　穂

昨夏、駆け足ではあったが西欧８ヵ国の歴史遺構や教育施設を見学する機会に恵まれ、教えられるところ絶大なものがあった。それらはいずれ劣らぬ強烈な印象を与えるものであったが、とりわけ筆者は全寮制の学校に職を奉じている事情もあって、英国のパブリックスクールの訪問にまつわるものが脳裏に焼きついて離れない次第であった。以下に感想を記したい。一ヵ月に近い視察旅行もほぼ終りに近づいた８月のある日、われわれはロンドン西郊約40㎞のイートンカレッジを訪問した。イートンカレッジといえば英国の歴史において雄名を馳せた数々の逸材を生んだ名門中の名門として知られているパブリックスクールのことである。その沿革も、遠くチュードル王朝ヘンリー６世の創設になるとのことであるから優に500年の星霜を数えることになるであろう。それらもさることながら筆者はこの学校の誇るエリート教育が果してどのような形で現代に引きついでいるのかということに疑問と期待のいりまじったいうにいわれぬ興味をつないだ。われわれは遠くウインザーの丘を望むイートンの古びた街並を通って茶色の煉瓦の建物の前でバスを降りた。イートンカレッジである。受付を経てアーケードをくぐると正門に一きわ高い時計台のある建物―College hall―を仰ぎ見たが、それは旧制一高の校舎を髣髴させた。一瞬日本の旧制高校と英国パブリックスクールの使命の類似を連想したが思考が続くには筆者は不勉強すぎた。同じく大学予科としての13―18才の少年の寄宿制による人間陶冶の場という程度の、夏の長いバカンスのことである。シルクハット、イートンカラー、イートンジャケットという例の勇ましいいでたちの少年たちの姿はついにどこにも見られなかった。しかし一ヵ月後彼等の姿が躍動するであろう教室や図書室 Chabel. グランドは存分にわれわれの観察に応じてくれた。われわれの目に映じたある教室の構造はきわめてユニークなもので、柱の多い長方形の大きな室内に、数人ずつは坐れるであろう長い机が、向き合って左右に数列ずつ並べられている、といったものであった。授業というものが対話ないし討論の形式によるものが望ましいとすれば大いに参考にすべき例である。ただ木製のその机はいかにも歴史の年輪の古さを思わせるに十分で、きずだらけ、凹凸だらけの板面は果して勉学のための実用性となるとどのようなものであろうか。勉学の実用性ということでもう一つ気になったこと。それはおそらくヒースロー空港を飛び立つと思われる飛行機の騒音である。まさに飛行機銀座とよばれるにふさわしい、ひっきりなしの騒しさで案内の説明も屢々途切れがち。これでは近い将来、名門校としての実績が期待できなくなるのではないかと心配するのは果して筆者一人の杞憂であろうか。かつて猛烈なトレーニングで知られた College field は今さわやかな英国特有の緑である。われわれはウェリングトンの「ウォーターローの勝利はイートンの校庭で生れた」という句をささやき交したものであった。ウェリングトンの名と共にグラッドストーン、ウォルポール、シェリー、キーツの名が同行者の口から洩れた。その他浅学の筆者にとっては初耳だがかなり著名の人物の名前も聞かれた。いわゆる Old Etonian である。あらためてイートン教育の層の厚さを知る一瞬である。数百年にも及ぶこのような名声は果して将来とも期待されうることなのであろうか。当初は貧乏な給費生のために作られたというこの寄宿学校が歳月を経てやがて、名門貴族が高い授業料を払い競ってその子弟を入学させるに至ったという。また国内に限らず諸外国の王室までその名声を慕い王子たちを留学させたいという、このイートンの教育の成功の鍵は何であったのか。今日ややもすれば見失われている真のエリート教育の実像がそこにあったからではなかろうか。エリート教育とは何も単に特権階級の子弟の教育将来を約束された秀才の養成というにとどまるのでなく、人間としてのさまざまの試練に耐えぬくような不退転の精神の持主を作り上げる教育のことなのであろう。またそのために自律心（向上心）の旺盛な若ものたちを投げこんで相互に切磋琢磨させる制度がふさわしいというこ

となのであろう。教育制度というもの何といってもたえず再発見の努力を重ねなければ、やがて虚名を伴うものとなるのは当然である。英国の人のそのような地道な努力に敬服した一日であった。

〒410　沼津市下香貫牛臥3025

赤道直下
シンガポールの思い出

M1　白　鳥　哲　夫

高専の第1期生を世に送り出すという事で、歓呼の声に送られて、現在の勤務先である三菱プレシジョン㈱〔注：フライトシミュレータ等を製造するエレクトロニクスメーカー〕に入社したのが、昭和42年4月の事であった。早いもので、もう11年になる。今では、申す迄もなく、第一線の仕事で東奔西走の毎日ではあるが（!?）、今にして思えば、一人の平凡な若年企業労働者〔注：サラリーマンの意味〕であった小生の如きには、思いもよらぬ貴重な体験をした事があったのである。

あれは入社して3年目（昭和45年）の事であった。

〔入社1年目〕"我社の将来は諸君の双肩にかかっておる"などと会社のおだてにのり、大した仕事が出来る訳でもないのに、猛烈にハッスルした1年が経ち

〔入社2年目〕　有頂天の時代はハイッそれ迄／　とたんに実戦実務の世界に端役としてかり出され、ただひたすらに仕事をした（というよりもさせられた）1年が経ち

〔入社3年目〕"会社という所は、やっぱり序列社会なんだなー"などと当り前の事に気が付き、その中のしがらみを目の当りに見ながら、自分の適性とは一体何だろうなどと考え初めた……（注：普通の人は5～6年目に考える様である）

そんな頃の話である。

小生が元々所属していたルーテル教会（マルチン・ルターが起こしたプロテスタント教会）の企画による青年信徒海外奉仕派遣計画〔PRINCE OF PEACE VOLUNTEER'S PROJECT："POPV"計画と呼ばれた〕なる話が、或る日関係筋の知人より小生に紹介があったのである。応募の資格だけはあったので、とにかく、受験してみたのである。それが、何のはずみか、合格という事になり数10名の応募者より3名が選出され、その1人になってしまったではないか。そのうちの2名はフィリピン、1名がシンガポールの各々のルーテル教会に派遣という事に決まり、小生後者に選ばれてしまった。いざ決まると事態は深刻である。会社生活に見切りを付ける程の勇気もなく"行くべきか、行かざるべきか？"などと、色々考え抜いた揚句、会社を休職して行ければと思い付き、恐縮しつつ上申したのである。これが、又、何のはずみか、"前例が無い事ではあるが、1年に限って許可する。但し無給であり、必ず復職すべし?!"との沙汰が会社から出たのではないか。首切りしてくれない程の重要人物ではなかったのだが。此の時の小生の心境はと申せば、"光明がさすのを覚えた／"という事になろうか。帰還後の職は確保出来たからである。兎に角、所定のプロセスを踏み、昭和45年9月から昭和46年8月迄の1ヵ年をもらい、早速、内地でのオリエンテーション、スクーリングに参加したのである。

勇躍、単身、シンガポールに飛立ったのは、確か、同年の9月中旬の事であったと思う。当計画は、初の試みで、テスト計画という事もあり、テスト派遣隊員に対しては任期1年、往復旅費、給料支給と言う条件つきであった為、小生のふところを痛める事は何もなかった。使命たるは、当計画の将来展開を前提にした現地での経済的自給自足の可能性、及び奉仕活動領域の調査という事であった。

初めての海外渡航、しかも単身で見ず知らずの世界にある種の活動目的を持って行くのであるから、小生の若い血潮は、まさに、沸点に達する感があったと申しても過言ではない。

シンガポールは赤道直下、常夏の国であった（勿論、現在でもそうである／）。夜は涼しく過ごし易いのを記憶している。赤道が見えるからと言われて丘にのぼる日本人観光客がいたようであったが、小生は夕涼みにのぼっただけであるのも思い出される?!　淡路島ほどの面積に人口200万（現在250万位と聞く）が住み、中国系、マレー系、インド系、その他様々の人種で構成される典型的多民族国家であり、風俗、習慣、宗教、言語が混合していて面白い文化圏を形成している。

自由貿易によって経済基盤を構築した社会主義国であり、予想外に秩序ある、清潔で新鮮な雰囲気を感じさせる国だったと記憶している。小生が住みついた所は、郊外にある低所得層の中国系住民が多く居住する大団地の中であった。その真中にルーテル教会があったのである。教会の管理人用住宅を無償で提供してもらい、1ヵ年の住み家としたのである。おのずと、管理人の仕事もさせられることになったのではあるが。

着任早々、教会関係者への挨拶廻りやら、活動計画の打合せ、諸準備であっと言う間に1ヵ月が経った。見る物、聞く物、全てが小生の好奇心を刺激し、常に興奮の頂点にいた様である。此の時にはすっかり会社の事は忘れていた。当教会には、アメリカからの宣教師と現地人牧師（中国人系の人）が各々、英語系、中国語系とに信徒集団を分けて受け持ち、その地域の牧開に当たっていた。小生はつたないながらも、英語しか出来なかったため、英語系信徒集団に加わり、その地域社会に於ける奉仕活動を展開したのである。青少年の聖研グループの指導、スポーツ少年班の結成、日本語クラスの開設、等々教会信徒以外をも対象とした活動を試みたのである。

日本の様に町内会制度の様なものはなく、又、青少年向のスポーツ、娯楽の施設も少なかった為、広い敷地諸施設を有する教会は、その団地の住民にとっては、あたかも福祉センター的存在であった事もあり、活動もすぐに軌道に乗った。旧世界大戦時代の苦労から、反日的感情を持つ人々も一部いた様ではあるが、一般に友好的であり、忙しくも楽しいペースで事は進んで行ったのである。

着任2ヵ月程してから、自給自足経済の可能性を調べる目的で、週に何回かに限定して、市街地の日系商社、ホテル等の従業員を対象とする日本語クラスの開設を試みたのである。もちろん有償である。シンガポールは日本との交易がさかんな国で、日本語が第1外国語とみなされる程であり、試みは順調に滑り出した。

しかし、それがわずか3ヵ月程しか続かなかったのである。それと言うのは、シンガポールと言う国は、居住外国人に対する職業管制が極めて厳しく、或る日突然、小生に対して、当局、つまり警察より、教会以外の仕事をする事はまかりならぬ、との勧告があったのである。計画なかばにて中断やむなき結果になったのは至極無念であった。小生は、宣教師ビザで入国していたのである。

警察官3人程が名指しで小生を捜しに来た時には、さすがにおどろきであった。税務所に出頭する様に命じられ、従わなければ国外退去せよとの事で、非合法所得（?）の申告手続きをさせられたりしたが、いずれにしても、わずかな額であったので事無きをえて、一件落着（あー恐ろしかった）／　此の時の緊迫感は、今でも忘れない。どうしてこうなったのかは今でも不明である。要するに、どこの国でももぐりで所得をあげてはいかんという事なのである。そうこうしているうちに、日本の家族やら友人等から年賀の手紙、励ましの手紙をもらうなどして国を思い出し、雪などを見たくなったりした事が思い出される。

ホームシックなる病気にかかったという事である。別段寝込む程の事はなかった。四季が全く無い所故、年の変わり目が実感出来ず、ただ時間の経つのが早く感じられたものである。年が変わってから、と言っても定かに認識はしなかったのだが、約半年強の時間は、あっという間に過ぎ去ったように思える。

滞在期間中、不思議と邦人グループとの接触、交友はなかった。現地人との生活、交わりにどっぷりひたっていたのである。それだけに、多くの友人がシンガポールに出来た。今でも文通などをしている。又、来日の折などに突然訪ねて来られたりすることもある。彼等との人間的で豊かな交わりの中に、改めて生きている自分、生きる喜びを実感した非常に貴重な年であったと思う。

帰国の日はすぐに到来した。あまりにも短かい1年の様な気がした。それだけ充実していたのかもしれない。小生が帰国する頃、これが又々、何のはずみか、航空機事故が頻発したのである。キャセイ航空機のベトナム墜落、全日空機の墜落等々である。自分の帰路に一抹の不安を覚えたのが思い出される。やっとの思いで、熱帯夜でむせかえる羽田に帰着したのが翌年の8月も終頃であった。

あれから7年もの歳月が流れたなどとは、とても思えない。時折、シンガポール時代の身軽で意気盛んであった頃の自分を思い出しては、生活の活力にしている今日此の頃である。さあー、頑張るぞ、又、明日から仕事だ／

ロシアの印象

M1　白　井　一　夫

私は昭和52年12月1日から53年4月10日迄NC工作機械5台の据付検収の仕事でソ連へ行って来た。共産圏への仕事は自由圏へのそれと違って、グループを作り必ずChiefを1人設けます。ソ連国内のそのグループの行動は全てその Chief を通して行なわれます。

我々は延べ5人、私は恥ずかしながらそのチーフとして約4ヶ月滞在しました。百聞は一見にしかずでこの原稿にとても書きつくせるものではありませんが気のつくままに述べることにします。

羽田からモスクワのシェレメチェボ空港まで約10時間時差は6時間。東京ーモスクワ間の気流は世界でも安定している方なので落ちることはあまり考えられない。しかし広大なそして真白なツンドラ地帯を見ると無事到着することを祈るしかない。モスクワ空港に着くと零下10°C位。私はうかつにもふつうの皮靴をはいていったため路面がつるつるとよく滑る。タクシーに乗る直前思いきりステーンとしりもちついた。市内まで約20分。出迎えの商社の人がホテルまで案内してくれた。「宿が予約してなくて」と言いながら案内されたそこは"ソビエトツカヤ"というホテルだった。ここはふつう外人は宿泊できないそうだ。建物は新しくはなかったが、おそろし

く豪華で階段や柱は大理石、真赤なジュータンが廊下や階段に敷いてある。約5mおきぐらいに等身大の鏡。私ともう一人の部屋はツインで3部屋になっており、中央にピアノ、テレビ、ラジオがあり、バス及びトイレは2ヶ所あった。我々は工場から迎えにきた通訳と打ち合せをして別かれた。前述したようにこのホテルは外人は宿泊しないので英語があまり通じない。一階のレストランへ行って本当に困った。ロシア語ばかりかろうじてドイツ語が少し。次の朝ベリヨスカ（ドルショップのことで外貨しか使用できない。従って現地人でも外貨でなければ買うことができない）へ行って帽子を買った。

帽子がないと寒さで頭がやられてしまうからだ。それから銀行へ行って100 $ばかり現地通貨であるルーブルに換えた。70ルーブルになる。その日の夕方汽車に乗って目的地であるチェボクサール市に向った。モスクワから東へ600 kmのところにある。翌朝7時頃着くようになっている。約16時間かかった。外はマイナス15 °C位。駅から15分位バスで行くと我々の滞在するホテル"ロシア"に着いた。

ソ連の街には同名が多い。例えばロシアホテル、ガガーリン通り、レーニン通り、赤の広場などモスクワにはもちろん他の都市の中にも必ずといってよいほどある。ここチェボクサール市は人口30万人。ボルガ河沿いにあり古くからの港町として栄えたが、最近は工場進出が目覚ましく、10年以内に大きなダム建設も予定されている。近い将来日本で発行されるソ連の地図にも大都市として載るに違いない。このホテルは七階建てで建ててから2年しかたっていない。私の部屋は4部屋あり、テレビは白黒である。見てもスポーツ以外はさっぱりわからない。毎日近隣諸国の出来ごとを放送する。日本の正月や春斗や成田闘争も放送した。日本のテレビ放送はだいたいにおいてピタリとした時間に終了となるがソ連の放送は終わりじまいという感じで決まっていない。後で他の国へ行って来た人に聞いたらピタリと終えるのは日本ぐらいだよと言われた。ボルガ河は大きく雄大で向こう岸まで約2 kmある。この辺で一番深い所で40 mだそうだ。冬なので氷が全面張っていて、トラックやバスが向こう岸まで通っている。電信柱まで建っていてまるで道路の如くなっている。氷の厚さは50～80 cm。この辺は雪積50～80 cm位で気温－20 °C位。今年は暖冬だそうである。道路は一面スケートリンクで雪の下は氷である。乗用車はぜいたく品でまだあまり普及していない。そのかわりトロリーバスや乗合バスが沢山走っていて市民は不便を感じることはない。夜12時頃まで走っているのでタクシーを利用しなくても済むわけである。バスの運転士や工場のクレーン士は殆ど女性である。今やソ連の労働人口の51%は女性であるとのこと。寒い国なので酒には強い。ほとんどがウオッカを飲む。コニャックは高いのでウオッカが主である。ビールはお茶がわりに飲んでいる。アルコール度は低い。

スピリッツという96%の酒もあるが、とても飲めない。従ってアル中も多く大きな社会問題化している。結婚しても3組に1組は離婚するそうである。主な原因はアルコールである。レストランの数は少なく、夜はほとんど予約で一ぱいになってしまう。特に楽団が演奏する日は飲んで踊って大変である。週に2～3回は演奏される。室内は暖房完備なのでオーバーをぬぐと女性の多くは夏の服装である。中にはノースリーブの人もいる。バーやスナックのようなもの、その他赤ちょうちんみたいなものは一切ない。主な社交場はレストランや劇場が主である。人口30万人のこのチェボクサーリ市にはレストラン6軒、映画館3軒、劇場5軒であった。劇場はバレーや舞踊を主とするもの、劇を主とするもの、音楽を主とするもの、子供達の演劇、音楽を主とするもの、というふうにわかれている。建物は大変立派である。音楽学校というのがあって子供たちで才能のある者は普通の学校のほかにそこへ通っている。小さい頃から英才教育である。この町にとって日本人は珍しいので我々はよく招待された。ソ連は多種雑多な民族からなっており、我々そっくりな人に時々出逢う。向こうも間違えて話しかけてくることがある。人種差別、偏見は全くない国である

冬は厳しく野菜や果物がとぼしい。この国が資本主義であったなら飢えて死ぬ人が多く出て、金持ちは巨大になってしまうだろうと思った。世界で最初の共産主義（実際は共産主義まで行っていないかな？）の国として革命の起きたのがうなずけた。

夫婦は共稼ぎがふつうであり、日本の女性は家に居るというと彼らにはそれが理解できないようである。保育所や幼稚園は完備していて安心して働けるのである。贅沢品は日本の約3倍、賃金は約⅓である。生活必需品は安い。家賃、電気代、ガソリン等はタダみたいである。どんな物を見ても値段が刻印してある。物価変動もない。魚はモスクワは別として内地ではすごく高い。肉類も高い。米やお茶もあるが水がうまくない。

ソ連は言うまでもなく軍事大国である。その軍事力は世界一、二位を競っている。人口約2億7千万人、中国インドに次いで世界第3位。歴史的にみると国境線は風船玉のようにふくらんだり縮んだりしている。従って今の地図は仮に線が引かれているだけであって実際にはどこが国境かハッキリしない所が多々あるのではなかろうかと感じた。日本のような島国に住んでいるとそんなこととても考えられませんが。しかしあの広大な土地の中には前人未踏の地が沢山あるに違いない。莫大な資源の開発が今着々と進められている。この国はまだまだこれ

から10年先20年先発展の一途をたどる国だなと強く感じた。国民皆兵制であるが大学へ行く者は生活費が支給され兵役も免除されている。高校のほか専門学校がある。大学の通信教育も盛んであり、いろいろな資格制度もあるようで働きながら勉強している人も多い。職業選択は自由で自分の適性に合った職業を選んで働いている。女性の場合、産休は半年有給で、あと半年は休んでもよいが無給だそうだ。もしそれ以上休んで働かない場合（勿論理由なく）は法律により罰せられるそうだ。有給休暇は年1ヶ月あり自由に自分の好きな時に休める。日本の場合も平均20日位あるがその消化率はきわめて低いのは皆さんよくご存じのところである。医療は全て無料である。年金は60才以上の人全てがもらえる。自分の土地もある程度持てるようである。中には Second house を持っている人もいる。真偽は定かでないが一番高級取りは軍艦の船長だそうだ。またシベリア開発に働く人は普通の労働者より倍近い賃金がもらえる。

日本でアンケートをとり最もきらいな国はソ連と答える人が一番多いそうだが彼らは日本はきらいな国と思っていないようである。私は対日感情の良さに面くらってしまった。彼らの今までの敵はドイツだったのです。戦争映画の敵は全てドイツ兵であり、今もって国民感情はドイツに対しては良くない。東ドイツ人も個々人を見るとソ連に対し真からの友人と思っていないのがよくわかった。共産圏の中で最も工業国は東ドイツでソ連もその技術をかなり新工場建設にあたって導入している。

彼らと接してみて個人個人はほんとうに陽気で良い人が多かった。軍人は「我々は攻めることはしない、敵が攻めて来た時守るための軍隊である。軍事力もアメリカや中国が強大なので我々も軍事費を多くしなければならない。できることなら民需品をもっと増やす方に回して欲しい。人工衛星など打ち上げるため我々の生活がその分苦しいのだ」と言っていた。ソ連は全部が公務員であり役人である。正式な場では全てプロトコール（義定書）なるものが優先する。立場が物を言わせるといった感じである。彼らは自分の置かれた立場は必死に守ろうとする。担当が違えば見向きもしないといったことも非常に多い。帰国する時2～3日モスクワ市内見物をした。クレムリンは市の中央部に位置し、モスクワ川の岸に沿った高台に、総面積28ヘクタールの広大な面積をしめている。レーニン廟には若い軍人の参拝が絶えない。

ソ連邦、正称はソビエト社会主義共和国連邦、ロシア語で略してCCCP（エスエスエスエルと読む）と書く。人間の住める世界の陸地面積の約⅙を占め世界最大である。12の国家と国境を接し、国境線の長さは、6万km。このうち¾は中国を含む社会主義国家と接している。ソ連には異なる言語や方言を話す120の民族が住んでおり、政治的には15の連邦構成共和国、20の自治共和国、126の地方または州・8の自治州・10の民族管区に分かれている。日本と比較するといかに大きな国かわかる。そんな中で我々は一地点に、しかもたった4ヶ月生活したぐらいで、ソ連の国がわかろう筈もない。底知れぬものを感じた。

S.53.8.18　K.СИРАИ
〒419-01　田方郡函南町間宮828

ミシガン湖畔にて

M1　大　沼　一　彦

アメリカに来て一番感じたことは、まず土地が十分にあること、余っていることです。土地の値段は日本の$\frac{1}{10}$～$\frac{1}{30}$ぐらいのようです（もちろんニューヨークとかシカゴのような大都市は除いて）。ですから一般のアメリカ人は日本人に比べて大変広い敷地を持っています。一概にはいえないが、最低で5倍平均で10倍の庭の広さです。

第二に感じたことは、アメリカ女性の$\frac{1}{3}$は大変美人、$\frac{1}{3}$が普通、$\frac{1}{3}$が大変太っていてブス（太り具合は日本人のそれとは桁が違い、胴まわりは私の5倍ぐらい、体重は80～100 kgあるように思える）。

第三は、食物の味が大ざっぱで日本料理のようにきめ細かさがなく、調味料も塩とケチャップぐらいです。日本の醤油やソースも売っていますが、所詮食物の味に対する発想が違い、あまり使わないみたいです。日本料理に早くありつきたいと、そればかり毎日願っている次第です。

第四は、アメリカ人が大変木を大事にし屋敷には50年以上たっていると思われる木が、多くの家に見られます。大きな古い木があるとないとでは、その土地の値段が大分違うそうです。

第五は、乗っている車の良し悪しの差が大変はげしく良いのはキャデラックやリンカーン・コンチネンタルのピカピカした車から悪いのは、ドアがちぎれかかったりバンパーがとれかかったり、ボンネットがなかったり、又全面錆だらけという次第です。日本では車検にとても通りそうもない車に涼しい顔をして老若男女が運転している。アメリカでは車検はないが事故を起こすと、当事者の負担は大変なものになり、それなりに自分の車の状態は自分で管理しているそうです。

第六には、ミシガンは森と湖の州なので蚊が日本よりはるかに多く感じます。

第七は、ゴルフが大変安くできます。ミシガンは山がないので平坦で日本のコースよりも簡単です。ティーグ

ラウンドがグリーンと同じようになめらかで綺麗です。日本のように土であったりボードを敷いてなく気分がいいです。価格は日本の$\frac{1}{10}$〜$\frac{1}{5}$。キャディーはおらず、カートを運転するので大変楽で疲れません。

第八は、湿度がないので日陰に入ると夏でも涼しく曇った日は8月でも肌寒く、長袖の下着をもってくればよかったと思っています。こちらの下着はすべて半袖で長袖はありません。

第九は、水のことをウォーターといっても誰にも通じませんワーラーまたはワーターといわなければなりません。レストランで最初ウォーターが通じず面くらいました。私の英語に対する語学力を一瞬疑ったこともありました。今では殆んどのことが何とか通じるようになりました。別に毎日勉強をしたわけでもないのですが、慣れたせいだと思います。

第十には、アメリカ人は口頭で言ったり頼んだこと（主に仕事の上）には、まず動かず動いたとしても大変遅い。ところが文書にして頼むと大変アクションが早くASME SecⅢでQA Manual に対する文書化をうたっているのがわかるような気がします。

とりあえずこの辺で止めときます。

〒 410-23　田方郡大仁町守木92

日本は商業上・技術上の世界 No.1 先進国

M1　鈴 木 カ ツ ミ

私は仕事の関係上、米国、カリブ諸島、中南米、英国に出張いたしました。

そこで考えます事は、日本は商業上、技術上の世界No.1の先進国である事です。

明治以来、日本は欧米から法律、政治、商業、技術等を学ぶ事を続けてきたという歴史を持っています。昭和50年代の今、それははるか昔の事の様に感じられます。

日本人が今後いかに成形すべきを考える事は今まで以上にむずかしいし、又成形のために時間も今まで以上にかかる様な気がします。未知の森の先頭を歩くことはたいへんです。自分で何が正しい規準になるかを発想し実行し、それを正義として他国に共通化していく指導性をも発揮し、責任を負わなければならないからです。

英国に出張して大英帝国の衰退を、学生時代もう16年も前になりますが、その時に私が受けた印象に比べ、著しく感じました。又、カリブ諸島、中南米諸島では明らかに日本人の行う方法、発言はそのまま命令の様に受け取られる面も感じました。

ある日、パラグアイ国のホテル一階テラスでジントニックを飲んでいましたところ、裸足のシューシャインボーイが靴をみがきにきました。コインを2つほどやると次にコカ、コカと言うのです。コカコーラを一杯飲ましてくれと言うのです。ホテルの制服を着たウエイトレスがそれをシッ、シッ、と追い出す手ぶりをしていました。

コカコーラは一杯飲ませましたが、ふとその時の私自身と、私の想像にある戦後の米駐留軍との比較が浮かびました。

商業上、技術上の侵略者とは言えないと思いますが、それほど先進であり続け、又先進と見られる事はむずかしい事なのだなと考えるしだいです。

S53年8月23日

ヨーロッパにひとり

M1　田 中 昌 一

1.　出会い

ヨーロッパの東の玄関口、ウィーンへと向かう旅程の4日目の朝の事だ。

横浜港で田口氏（ＥＩ）に見送られ、ナホトカ港からシベリア鉄道の夜行列車に乗ったのは昨夜の事だった。列車は朝靄に覆む原野を走っている。朝食をとるため食堂車へと向かう途中、狭い通路で車窓にもたれ、外を見ている日本人がいた。ふと振り向いたその顔に見覚えがある。カートン（ＭＩ川崎勇）だ。

お互いに見つめ合って数秒、その時、彼の発した言葉は、5年近くもたった今でもはっきり覚えている。「何だア、田中じゃないか。何でこんなとこにいるだア。」確かに、こんな所には違いないが、これが卒業以来6年半ぶりに会ったいかにも彼らしい言葉だった。彼を知るものには、その時のカートンの表情と会話の抑揚は十分想像しうるであろう。

まさに奇遇であった。モスクワまで商談に行くというカートンとは、ハバロフスクからモスクワまでの飛行機も、モスクワでのホテルも一緒であった。そして、卒業後モスクワに留学していた彼のロシア語のおかげで、フリーのツーリストではなかなか手に入りがたいボリショイ劇場のオペラの券を購入でき、同行を希望していた女性2人と私の3人は、他のメンバーとは別行動をとり、モスクワの優雅な夜を楽しむ事ができたのである。その夜遅く、彼の部室へ別れを告げに行き、それきりだが、現在はどうしているだろうか。

2.　喪　失

モスクワから飛行機でウィーンへ入ると、いよいよ目的を異にするヨーロッパ行きのメンバー約50人との別れである。空港で約半数が別れ、セントラルバスターミナルでは、ウィーンへ来るまでに親しくなった数人だけとなり、さらにウィーン西駅では、去りがたい思いを捨て健闘を誓い合ってそれぞれが、列車で西へ南へと、あるいはウィーンの街中へと散ったのである。これからが、本格的な一人旅の始まりだ。私は当日の宿など予約してなかったので、まずホテル探しだ。

とにかく、駅近くのホテルで、英語とドイツ語を混えて一夜だけなら空いているという部室を確保した。が、問題は翌朝である。朝食の際ボーイが、ドイツ語か英語かと聞くので、英語と答えたのはよいが、うなずいたボーイの話す英語が全然聞きとれないのである。昨夜、フロントでは通じたのに何という事だ。結局は、彼は、コーヒーか紅茶かを聞きたかったようであるが、これにはさすがに自信過剰気味の私も、完全にその自信を喪失した事であった。ドイツ語とフランス語は旅行前に若干の準備をしたけれど、英語は当然できるものと思い何らの準備もしていなかったのである。この朝の出来事で、正直なところ、はや日本に帰りたいと真剣に考えたのだった。しかし、この後、英語はもちろん、ドイツ語も段々と、買物程度の会話には慣れてくるのだからよくしたものである。

3.　「ボン・コレラノ」

重い荷物を預けるため、西独のデュッセルドルフに友人を訪ねたが、出張中で会えなかったため、予定を変えてイタリアのミラノにいる大橋祥明（Ｍ1）を訪ねる決心をした。

決心というとオーバーなようだが、当時イタリアではコレラが大流行しており、旅行者の入国は自由だが、出国一時禁止などの噂もあって、コレラの予防接種をしていない私には、不安だったのである。しかしやはり、重い荷物からの解放という誘惑には勝てず、ミラノへと向ったのである。途中、車中で、最近イタリアから帰ってきたという婦人と同席し、いろいろな話をした際、私は「コレラはどうか？」と尋ねたのである。その時の「ボン・コレラノ」の彼女の一言と屈託のない笑顔が私の不安を一掃してくれたのであった。こうしてミラノで無事に会い、諸々の歓待を受け、荷物も預けて身軽にもなれたが、彼の板に着いた外国の生活ぶりには感心させられた。

4.　牛よ怒れ

スペインは物価が安い。ちょうど石油ショックの境目の時期ではあったが、私の泊まったマドリッドの安ペンションは朝食付き一泊450円である。夕食をつけても800円たらずである。ちなみにカフエでコーヒーが25円小ビールが30円等々。

そのスペインの夜は長い。昼休みの長い分がそのまま夜へと押されているのであろう。午後10時過ぎに始まり午前2時過ぎに終演するフラメンコショーは、ギターの旋律と手拍子が時に激しく、時に哀しく調和し、踊り子の華やかな舞い姿とともに、忘れられないシーンではあるが、同じマドリッドで、私はそれと似て非なる興奮と哀しみに出会ったのである。闘牛である。完全武装した騎士に、槍で突かれ、無理矢理闘争心を煽られ、ついには闘牛場の土を血に染めて倒れた牛達の哀しみと恨みをこめた鳴き声が、熱狂する観衆の声援以上に大きく、私には今でも聞こえるのである。一人旅の異国の夜は哀しいと言うけれど、深夜、宿へと向う私には、マドリッドの夜は殊に哀しかった。

5.　大英帝国に敬意を

ロンドンへ着くと、どんなに小さな雑貨屋でも英語が通じる。あたりまえの事だけれど、英語の通じないヨーロッパ各国をまわって来た私には、大変嬉しく思えたものである。

宿は衆知のＢ＆Ｂ（ベッドアンドブレックファスト）をとったが、文字通りの民宿で、部屋数は5つ、家の鍵と部屋の鍵を渡され、家族同様に待遇してくれた。家具調度も大変に高級である。テートギャラリーに見る、レディオブシャレットの絵の如き女主人の品位といい、格調高い英語と併せて、衰退しつつあるイギリスとはいえ大英帝国に敬意を表することしきりであった。

スイスアルプスのふもとの湖、トウーン湖の船上で、2時間程語らい、私が教えた“サムイ”を連発していたインターラーケンに住む美しい少女とその家族。アルプス登山電車について、親切に世話してくれたクライネシャイデックの駅員。ザルツブルグの奥地にあるザルツカンマーグートの山と湖と教会。などと、忘れられない人々町は、いくつかあるけれど、ロンドンの町に響き渡る大きな鐘の音を聞きながら、ヨーロッパひとりに終止符をうつ事を決めたのだった。

今こうして、その旅程をたどっていると、巡りまた、来たる春秋の無言の厳しさと、優しさを、その縮図として、この旅行に見る思いがするのである。

日本を離れる事の多いであろう、大橋祥明・川崎勇、その他諸兄の健闘を祈りつつこの稿を閉ず。

〒 430　浜松市和合町779

滞米生活を経験して

M2　長 橋 直 人

私がアメリカへ行こうと思いたったのは26才になった

ばかりの昭和48年春であった。それは高専時代から英語が好きだった私の20代にやっておきたかった夢であった。その後具体的に準備を始めてから1年、幸運にもTOEFLテスト結果が良く、サクラメント市にあるCalifornia state University の3年に編入学が許された。高専の諸先生方に入学に際してお世話になった。27才になった昭和49年6月に単身渡米した。

初めての授業は緊張と不安の連続であった。高専時代の一般科目は体育を除いてほとんど認められなかったので1年2年の教養科目をほとんどとらされるはめになり一時に絶望的になった事があった。とにかく先は長いので目先の事をひとつひとつ片付けていく態度に終始したのがよかった。

最初の1年は環境への適応に苦労した。肌の色が異なる人種に違和感を持ち、孤独に耐える事が何度かあった。2年目になり、語学力が向上し、友達ができて、授業についていくこつがわかってきたので余裕がうまれてきた。昭和51年5月、夢にまでみた卒業式を迎える事ができ、感無量であった。

渡米中、日本を離れて日本を考えるチャンスに恵まれた事は大きな収穫であった。

次の一連の文章は渡米中にいろいろ感じた事をまとめて新聞社に送ったものですが、当時の意気に燃えていた時のアメリカについての感想ですので添附します。

私は昭和49年6月20日に渡米、現在、California state University sacramento にて機械工学を専攻しています。渡米以来こちらの教育システム、生活、人々の意識等を知るにつれ、日本のそれと比較して、いろいろ考えさせられる点があり、自分の主観的見方かもしれませんが感じた事を伝えたい気持になりました。

私は決して極端な愛国主義者ではありません。ごく平凡な一般人と思います。しかしこちらに来てアメリカ人と話をし、時には議論をし、彼らの日本に対する見方を知るにつれ、時にはうれしくなり（彼らは日本を highly industrialized country と評価している）、時にはくやしく思いました。（日本は軍事的にアメリカから独立していない、攻められたらどう守る）、そして日本をもっとよくしたい。日本の国際的地位を高めたい気持がわいてきたのは異国にいる日本人にとって当然ではないでしょうか。愛国主義は軍国主義につながると言われますが最低限度の防備、自分の国は自分で守るという事は必要だと思います。日本がいくら再軍備してもまわりからの攻撃を防げないではないかという議論、その他の問題点はいろいろありますが長くなりますので国防の根本的考え方だけにとどめます。日本にいた時はほとんど考えた事がなかった事をこちらへ来てよく考えます。それらをできるだけ盛りこんだつもりですので長い文章になってしまいました。

アメリカに住んで日本を考えたひとりの一般人の物の見方として日本にいる人たちに読んでいただければうれしく思っています。

昭和50年8月29日サクラメントにて

アメリカ滞在記

〔前書き〕

私がアメリカへ来て以来1年と2ケ月がたった。学ぶ事がいろいろあった。

日本にいる時、考えなかった事を考えるようになった。そして日本の皆さんに自分の感じた事を伝えたいと思った。

これは私自身の主観的見方であるが日本を外から見る機会を持った人の共通する見方ではないかと信ずる。

〔日本の防衛問題〕

日本は安保条約により、日本の防衛をアメリカに保証されている。日本の経済は国の予算のうち軍事費にまわす分を経済発展にあててきたおかげで驚くべき発展を遂げた。それはアメリカ人は百も二百も承知である。アメリカ人は日本を発展させたのは自分たちの軍事的保護による力が大きいと思っている。逆にアメリカ人は軍事的には日本はアメリカから独立していないと思っている。

ここの大学に入学する前、私はオークランドの語学学校にいた。ディスカッションのクラスで先生は言った。「日本はアメリカから軍事的に独立していないではないか」。私は反論しようとした。反論できる者はだれもいなかった。もし他の国から攻められたらどう守る。アメリカさんたのみますよと言うしかないではないか。

アメリカは防衛に関しては多大の金をつぎこんでいる。それは自由の権利を守るために当然の事と思っている。日本は他人のかさにかくれて防衛の大切さを知らない。自由を獲得するために歴史上多くの人が死に、多大の犠牲を払っている。それが今の自由世界の源である。我々日本人はその苦労を知らず、その安楽の中で暮している。与えられた自由であり、自分たちで築いた自由ではない。だからその自由の防衛の大切さを知らない。

日本憲法は核の保持を禁止している。一見平和である。しかしそれは日本の中だけに通用するのであって外から見ると何ともはがゆい。アメリカ、ソビエトをはじめ、中国、フランス、インドも核軍縮の大切さを認識している。しかし彼らは全面核戦争はありえないと知っている。

自国の防衛のため、自国の地位向上のためであると思う。

先日家から送られた静岡新聞の論壇に目を通した。それはジュネーブの特派員からの記事であった。パリのエ

アショウにおいてソビエト、アメリカをはじめ、イギリス、フランスは軍用機売り込みにすさまじい運動を展開している一方、日本は某社がターボジェットのビジネス機一台を展示しただけで全く影はうすかったとの事である。

航空機業界は国の威信を作るひとつのリーディングインダストリーと信ずる。

日本の航空技術開発の遅れは軍事産業が日本にない事に起因すると言う。

以下、新聞の記事を引用させてもらう。

「どの国の航空機業界も大きな軍需の支えがなければ航空機の研究開発は至難である事を物語るものである。アメリカが宇宙開発であれだけ目覚ましい進歩をとげたのも軍部のばく大な研究費の投入があったからである。

日本以外の主要大国がいずれも自国の航空機や防衛産業の育成のためにその製品を世界中に売りまくっている現状において日本だけが平和国家の空念仏を唱え、指をくわえて傍観しておれば将来どうなるであろうか。」

私の学校にいる歴史の先生（博士）は第二次世界大戦時の日本陸海軍の賞賛者である。

日本海軍は数百年間海の支配を続けたイギリス海軍を破った。私は山本五十六を尊敬する。君はそれを誇らなければいけないといつも言われる。何となくはがゆい。現在はどうだろうか。日本は今軍備を誇れるのか。自分たちの国は自分たちで守ろうではないか。

これは国防の原点であると思う。

〔アメリカの教育システム〕

渡米後最初の一年は環境の急激な変化で、精神的にも肉体的にも苦労をしたが、慣れてくるに従い、アメリカの大学で学べる幸せを感じる。そしてこちらの教育システムはすばらしいと思う。

最近の技術はすさまじい勢いで発展している。我々はそれに追いついていくために、現存の教育期間では不充分で教育期間の延長、職場内での延長教育、生涯教育の必要性等が言われている。そういう中で日本の大学の門戸の狭さがなんとかならないものかと思う。

アメリカでは、いったん職業についた者が必要に迫られてその基礎を習うためコースを取りに大学へもどるのは日常茶飯事である。例えば会社員が最近のコンピューター発展に伴ない、フォートラン言語の習得の必要性にかられたとする。彼は大学に行き夜間のコースに登録し若い者と席を並べて勉強できるのである。大学の豊富な施設、図書館等を自由に利用できるのである。

日本の大学は門を広くし、習びたい者はだれでも受けいれるようにできないものか。学びたい者を学校に入れてその中でふるい落としていく。ついていけなければほおりだせばよい。

アメリカでは大学院まで行く者が多い。大学には博士号をもつ先生がほとんどである。ブレインが豊富である。日本の教育もレベルアップが必要と思う。

こちらのほとんどの先生は教える事に全力を注ぐ。教える事に徹する。自分はこちらでは外国留学生であるので先生に近い、いちばん前の所にいつも席をとる。従って、彼の迫力がもろに伝わってきてこわいくらいである。わかったか。質問はないかと全員の注意を促す。学期の最後にインストラクタイバリュエイション（教授評価）を渡される。先生を評価するのである。二十項目ほどあり、その教授の教え方、学生の疑問をわかり安く説明してくれるか、遅刻はしないか等に対し五段階の評価をするのである。その資料は次の学期のコースを取る者の資料に提供される。従ってほとんどの教授は日本の教授に見られるようなのらくらした教え方はしない。教える事に必死であるように見える。

先学期、スプリングシメスタにP.E.120（フィジカルフィットネス）をとった。

このコースは三週間毎にランニング、柔軟体操、水泳ウェートトレーニングとクロスカントリーのセクションを順々にまわって一応の体の環境への適応性を高める事をねらいとするコースである。（毎日9時から10時まで）私は不幸にもランニングセクションで足を打撲し走れなくなって、水泳のセクションを二回やらされたのである。

春三月末から四月最初にかけて気温10°C以下の続く日、風雨にかまわず25ヤード屋外プールで泳がされたのである。（このコースを取る前、このコースに水泳があるとは思わなかった。知っていれば取らなかった。）水は温めてあるが、止まると震えがくるし、水からあがると強烈に寒いのでいつも泳いでいなければならない。毎日40ラップス（約1㎞近い）泳がされたのである。日本では運動神経が良い方で体操はいつも優であったのである程度の自信を持っていたのであるが、こちらでは女の子といつもビリを争って（男女一緒である）全く自信をなくしてしまった。

日本で自分はアベレージ以上と思うが、こちらではビリに近い。この事は日本の水泳界の不振と共通する点があるのではないか。全体的レベルアップが必要と思う。水泳訓練の強化とともに日本人は欧米なみの体格が必要と思う。日本人の体格を欧米なみに近づける対策を施すプロジェクトが組めないものかと突飛な事を考える。

〔親子の関係、育て方、人間的成長の違い〕

こちらへ来て私は若く見られる。今28才であるが28才に見られた事はない。18才から23才までしか言われない。もっと年上だと言っても25才までで28才とあてられた事はない。この原因として体のつくり、外観が日本人

は小さいので私の場合、こちらの18才〜23才ぐらいにしか相当しないのではないかと思っている。5才程度若く見られるのは日本人一般的傾向のようだ。これはある意味で損な事と思う。年相応に見られたい。日本人の体格の向上を願う。

精神年令はどうかというと、こちらの学生は自立心が強く人前でも臆せずものを言い、クラスでは質問がぼんぼんでる。大人である。女子学生もどうどうとしていて決して男子学生にひけはとらない。なぜか。そのひとつは育て方に起因しているのではないか。

日本の親は子供の面倒をよくみる。子供も親が面倒をみてくれるのを当然と思う。その程度が行き過ぎと思える。日本の親は子供のためというより自分の享楽のためにかわいがるようにも思える。その結果、高校生、大学生になっても親に頼り過ぎ、精神面で親から独立できない者もいる。

こちらでは子供の時から自立心を育てる育て方をされる。これはしてはいけない事ですとしてはいけない事を教え、して良い事は助長してやる。そしてでるくぎをどんどん伸ばしてやる。日本ではしてはいけない事を教える場合そんな恥ずかしい事はするな、世間が何と言うか人から笑われるぞと人を気にさせて恥ずかしい気持を起こさせようとする、あるいはだれだれさんに負けるなと人との競争心をあおりたてる。その程度が激しい気がする。教育ママという言葉はそれを代表すると思う。従って人を必要以上に気にして人前をいやがる。でるくぎは打たれるように思える。

〔人種問題、一世二世三世の世界〕

アメリカは人種のるつぼと言われる。日本で想像した以上にいろいろな人種がいる。白人黒人だけではない。東洋人、メキシコアメリカ人、インドアメリカ人、アメリカンインディアン、数えたらきりがない。

私は日本人である。髪の毛が黒い。皮膚が黄色い。こんな事はアメリカに来る前は気にした事がなかった。しかしこちらに来てよく気にする。むこうから自分と同じ髪の色をし皮膚の色をした者がくる。日本人であるかチャィニーズであるか二世三世であるか見分けがつかない。しかし白人ではなしマィノリティグループ（少数民族）である事は間違いない。

去年のクリスマスに近い日、クラスの友達から彼の家庭に招待された。彼は結婚して数ケ月であった。若い奥さんが私に言った。「失礼な事を聞きますがあなたはブラックジャパニーズか。」（黒人と日本人のあいの子）私はショックを受けた。自分の顔の色は黒い方だが私より黒い日本人はたくさんいる。

日本に黒人はいないと言ったらその奥さんは愚かな質問をしたと非常に悔いて御主人である私の友達に慰められていたが、私はこの事で自分をブラックジャパニーズと見るアメリカ人がいる事を知ってびっくりした。こちらに二十年近く住んでいる日本人、黒人はベジタブル（野菜）、日本人も一段下に見られている事はまちがいないと言い切った。そしてアメリカ人は観光で来ている日本人には親切だがいったんアメリカに永住しようとする人あるいは永住している人には抵抗を示すと言った。

こちらに住んでいる日本人家庭を訪問する機会がよくある。なんともちぐはぐした雰囲気を感ずるのは自分だけではないと思う。お父さんは鹿児島から戦争直後に来てあとで家族全員を呼んだ。彼は庭師で一家の生計を支えている。お父さんとお母さんは未だに日本語しか話せない。子供は日本語がおかしく（小学校時分に来たので）英語はペラペラである。親子の会話は英語と日本語のごちゃ混ぜが使われている。典型的一世の家庭であると思う。

幸運に私はこちらの一世二世の子供（中学生）に日本語を週一度教えるチャンスを持っている。彼らの殆んどは日本語を習いたいと思って習っているのではない。親が通わせているのだ。子供はいやいやながら教室に来ている。

ある時日本から比較言語を研究している教授が来た。彼はスピーチを求められ言った。「皆さんはアメリカ市民です。日本の文化を学んで日本と仲よくしましょう。」という意味の事を言った。私は瞬間疑問を持った。彼らはこちらでは日本人と呼ばれているのだ。その後私は彼らに聞いてみた。「君たちは自分を日本人だと思うかアメリカ人と思うか。」彼らはむずかしいと言う。ある者は日本人だと言い、ある者はわからないと言う。よくできる学生がしばらく考えてから答えた。「国籍はアメリカだが人種は日本人だ。」

彼らは自分たちは日本人だと思っているのである。しかし日本語を話せない。アメリカ人は彼らを日本人と呼び日本にいる日本人は彼らをアメリカ人と言う。彼らはいったいなに人か。宙に浮いた世代なのだ。

ある者は言う。見方によっては彼らの世界が国際舞台における日本人なのだ。言語の障壁を除かれた日本人なのだ。

〔日本人の英語、日本人の国際性〕

この夏、私の大学キャンパスに夏期休暇を利用して日本から百人以上の人たちが英語を習いに来たと言う。中学、高校で英語を教えている先生も相当数いる。彼らと話す機会があった。

私はインドから来た留学生と親しかったので、彼とキャンパスベンチで話していたところ、日本の英語の先生二人が寄って来てインド留学生と話し始めた。私は彼らの英語はへただと思った。日本で英語を教えている先生の英会話のレベルは相当低いと思った。彼らが日本で英語を教えているのである。インド留学生があとで私に言った。「君の英語の方がずっとうまい。」彼に彼らが日本で英語を教えていると言ったら、彼はびっくりして首をすくめた。「君が日本に帰ったら、君の英語はすばらしいだろう。」と言った。

私は会話の英語ではほとんど苦労を感じないが、授業での英語、クラスでの討論、先生の言った事のディクテーション（筆記）では多大なる苦労をしている。自分の英語はまだまだだと思って時々がっかりする。自分を含めて日本人の英語を見た場合、日本人は学校で相当語学を勉強させられている割にはうまくないと思う。他の国から来た留学生は英語をうまくこなすが、日本人留学生はへたである。日本人はなぜへたなのか。教育システムの再考を請う。

アメリカのほとんどの人は日本をよく知らない。人口が多い、技術の発達した国という程度である。誤った見方もある。偏見もある。

この夏に私は「コンピューターと社会」というコースを取った。このコースは、コンピューターが社会にどのように使われているか、その役割、その未来を討論するコースである。その中で時折日本が話題になった。先生は、私はソ連への技術輸出に反対すると言った。学生が質問した。では日本への技術輸出はどうか。日本製品は日本の低賃金、超過労働に支えられ、アメリカ経済の他方面にくいこんでいる。そういう状況においてアメリカは日本に技術輸出する必要があるか。

私は日本の労働条件、賃金体制は昔に比べるとずっと向上している事を知っていたので、その点を是正しようとして話したかった。しかし話す勇気がでなかった。

時折友達と議論する事がある。むこうがペラペラいってくる。こちらはペラペラ返せない。ペラペラ言い返したい衝動にいつもかられる。ひいてはそれが日本を理解させ、日本の立場を向上させると信ずるからだ。

夏毎に観光を兼ねてやってくる日本人、カメラを片手に手当りしだいにとりまくる。日本を理解させるどころか、日本のイメージを逆に下げる感じがする（私もその一員だったのだが）。私の友達の言った皮肉なことばを思い出す。

日本人はこちらの物を手あたり次第に撮りまくり、日本に帰ってさらに良い物を作ろうとする。

日本人の語学の力が伸びれば、日本の国際舞台での立場が向上するのではないかと思ったりする。

〔日本人の優秀性〕

日本人は他国に比べて頭がいいと思う。日本の経済発展は日本人の優秀性を示すものと思う。

私の米国大学一学期目は、緊張と不安の連続だった。果して授業についていけるだろうか。不安はいつもつきまとっていた。二学期目は人より余計に単位を取ったため、一学期目以上に苦しかった。そして今夏の学期を終え、成績は15科目43単位中、B（80点以上）が2つの他すべてA（90点以上）をとれた。

日本には私より優秀な人がたくさんいる事を知っている。私はこちらでトップクラスにいると思う。従って、日本人はすぐれた民族と思っている。

しかし、アメリカ人でできる者はとびきりできる。優秀な者は群を抜いている。国家発展に寄与する者の中でそういう人たちが先頭に立つ。そういう人たちがアメリカには豊富にいる。日本はどうか。日本のあらゆる分野にとびきりすぐれた人材をたくさん欲しい。

〔アメリカの生活〕

アメリカの生活は日本より豊かであると思う。家を比べてみてもその広さは各段に違い、こちらはスペースが広くゆったりしている。庭も広く、犬・猫が遊び、生活に潤いがある。小鳥は人間をこわがらず、そばを通っても逃げようとしない。物価は高くなったと言っても比較的安定している。バスの運転手は乗客と親しくあいさつをかわし、老人には親切である。人間に寛容の精神が備わっている感じがする。これは土地の広さに起因するのではないか。うらやましいと思う。日本にもっと土地が欲しいとどうにもならない事を思ったりする。

終わりにあたって

〔世界の中の日本、個人の役割〕

日本は狭い。日本は人口が多い。その中で必死にがんばっている。外から見ると日本はよくやっていると思う。しかし、あまりに現在の平和にひたりすぎていて自分勝手な感じもする。外の世界を知らない感じがする。世界における日本の役割を考える時に、日本はその資源を外国に依存している事実をもっと考えたい。その事実をふまえて日本の役割、個人の役割を考えなければならないと思う。

夏学期にとった「コンピューターと社会」のクラスで人口問題にからんで学生が質問した。「我々は、将来食料危機がくる事を知っている。産児制限は徹底しなければいけない。我々だけが努力しても、他の国例えばインド・日本など人口の多い国で産児制限に努力しない国に食料を輸出する必要があるだろうか。」（私は、日本は産児制限に努力していると信ずるが）。

私の親しい友達アメリカ人は、将来肉が不足するだろうという理由でベジテリアン（菜食主義者）になった。これは極端な例かも知れないが、アメリカ人は将来の問題を個人個人で受けとめ、考えている感じがする。

日本人1人1人に、そういう意識があるだろうか。

昭和50年8月29日　カリフォルニアステートメントユニバーシティサクラメント在学

心

電気5期　水　上　重　徳

最近のレジャーは、何と言っても海外旅行に限る、とか。円がドルに対して強くなってきた、とか。エコノミック・アニマルとか。兎に角、人間と人間の融和を尊しとする、小さな小さな島国の気質は、思ったより強烈で他国へ行って、初めて理解できるものであろう。

私は二度程、仕事で出張を命じられ、西側の国と東側の国へ行ってきた。いずれも流通貨幣がドルでない国。こうなると当然、英語以外の国語をもった国。単語を並べることだけならば何とかなる私も、これには、ほとほと参ってしまった。"おはよう (Good Morning)" が通じず、"ありがとう (Thank you)" が解からないのである。

それでは全てに苦労したのか、というと、これが全く逆の事が多い。生活その他に必要な語彙は案外少ないことである。数字を別にすれば、ほんとうに少なくて済むのである。だから、英語にある程度の覚えがある人は別として、普段から英語に何らかの興味を示しておくか、又は、英語・独語・仏語、そして露語などをわずかでもかじっていれば、"何とかなるもの" なのである。

ここで一番大切なことは、その国の言葉を一つでも話す努力を惜しまないこと、特にこの時、正確な発音を教えてもらうことである。私たちの様に仕事で行く場合は、これが全てをうまくまとめる "コツ" ではと思っている。勿論、工場の責任者とか、チーフと話す場合は英語のみならず、これが思いの他、役に立つのである。

また、これは、長い間、異国で仕事をしている人から聞き、私も身をもって感じたことであるが、何をするにつけても、毅然とした態度を示すことである。日本人の "なあ、なあ" 気質、これは不信感を抱かせて、百害あって一利無しである。ところが、これが非常に困難な事なのである。経験も必要であろう。知識も必要であろう。ここまでは、会社での仕事上の苦労と、母校に於ける、ほんとうに幅広い雑学が、非常に役立つと思う。尤も最近は、教育課程の変更もあって、それほど幅広いとは言い難い気もするが。そしてもう一つ、誠意が必要なのであろう。とは言え、営業的な場合と、技術的な場合で、ニュアンスの違いはあろうが。また、その地に居る期間の長さにも依るだろう。

しかし、この様な事にばかり気を遣うことこそ『愚』なのである。自費で行けるかどうかは別にして、一(いち)サラリーマンが、時間的に束縛されているなかで、与えられたものとは言え、このチャンスを充分に活かすことに、大きな意義があると思うのである。音楽にしろ、絵画にしろ或いはオペラ劇にしろ、更にはスポーツにしろ、存分にその国を味わうことである。それが自慢話の種であってもいいし、自己満足の想い出であってもいい。それが青春ではないだろうか。何時までも青春であり、何処までも青春なのでは、私はこう思うのである。

朝は曙(あけぼの)　漸(ようよ)う薄明るく成り行く
　　窓際　紫だちて　雲の低く　垂(た)れ籠(こ)めたる……

え？　銘文ですって。雑学にもっと身を入れなければだめですね。

そんな訳で、仕事に嫌気(いやけ)のさしはじめた、ある国の、小さなレストランへ入った時の事である。私は何時(いつ)もの様に腕時計をしていた。すると、隅のテーブルに座っていた、年の頃なら六十五歳を越したと思われる、見ず知らずの老人に手招きされた。決して立派な身なりとは言えない、ごく普通の人だったのだが。好奇心も手伝って彼のテーブルに行くと、流石(さすが)に、言葉は通じないと思ったらしく、手振りで、こんなことを言ったのである。

「腕時計をしているね」

「時間を知りたいのですか」

「いや違う。時計は右手にしてはいけない。左手にしなさい」

「どうしてですか」

「時間を刻むものは、人の心であり、それは心臓に近い方の手にするものだよ」

「そうかもしれませんね。ありがとう」

……

勿論、片言の、単語も幾つか並んで、一緒に食事をした。そして別れた。

これが、この様なことが、外国へ行くとあるのである。愉快なことである。

∞ 近　況　報　告 ∞

まだ頑張ってます！

M7　中　西　憲　男

早いもので、高専を卒業してから6回目の夏を迎えました。今年の夏は例年になく暑い日が続き、こちらでは連日、真夏日とやらの記録を更新していますが、元気でやっています。

私は現在、埼玉県朝霞市に在る本田技術研究所・朝霞研究所に勤務し、二輪車の研究、開発に従事しています。学生時代から二輪車の好きだった私にとっては、格好な職場というわけです。仕事の内容も、二輪車の開発（特に騒音関係）ということで、学生時代余り勉強をしなかった私にとって大変ではありますが、又、反面非常にやり甲斐のある仕事です。特に相手が不特定多数の顧客という事から、二輪車の出来不出来がそのまま売り上げに響いてくるだけに、自分の担当したプロジェクトの二輪車の売り上げに一喜一憂しています。

さて話は変わりますが、テレビで連日甲子園の高校野球を中継していますが、野球部のＯＢのはしくれである私にとっては、この季節になりますと、我母校の県予選の結果が非常に気がかりになります。

実家に電話して試合の予定日を尋ねたり、新聞の地方予選の結果欄の小さな活字を一生懸命追いかけたり、大変です。

今年は袋井商に3対4で敗れたそうですが、本当に惜しいことをしました。

それとは別に、毎日新聞の地方予選の結果欄を見てはどこの高専でもいいから「高専」という文字を探し出しては、その結果に関心を持っています。というのは、同じ高専だというよしみもありますが、それより高専の野球が勉学等で練習が制限されたり、必ずしも満足のいく状態の中で行なわれていないのを知っていますから、ガンバレと応援したくなるわけです。

しかし、勝負事は勝つに越したことはありませんし、満足出来る状態でなくても、そういう環境に負けずに頑張る事が大切だと思います。心の中では、来年も頑張ってくれと願っている次第です。

取り留めのない事を書いてきましたが、私事では、昨年の秋に結婚し、一層責任を感じなければならない立場になってきましたが、やっと学生気分が抜けたばかりで自分の未熟さも手伝い、まだまだこれからという感じです。

最後に、沼津高専の名に恥じないよう、これからも頑張っていきたいと思っています。

S53年8月16日記

〒351　埼玉県朝霞市大字根岸1456
田　宮　荘

技　科　大　近　況

M11　清　水　　明

私はこの四月から豊橋技術科学大学に通っていますが、何分うちの大学は国立大学。そこで納税者のみなさまからの御質問にお答えしようと思います、

Q　いやに長ったらしくて舌をかみそうな学校名であるが、なんとかならないか？

A　誠にごもっともな質問なんですが、すっきりとしてしかも威厳のある学校名をどうしても思いつきませんでした。また、技術科学大学であって、なぜ科学技術大学でないかということに関しては、科学技術庁というのがございまして、それが総理府の管轄で文部省でないということから、やはり技術科学の方がよかろうということになったわけです。
（これは私の推論です）

Q　高専の教育レベルは大学工学部とほぼ同等であると言われているが、それでは、技科大の三、四年では何を教えるのか。別に教える事はないのではないか。

A それもごもっともでありまして、実は、そこが教授連の共通の悩みであるようです。実際、我々が現在教わっている事柄の一部には、一般の大学の大学院レベルのものも含まれています。高専卒業者は同じ事を二度習うことになるので、勉強に対する意欲を失わないよう、努力しなければならないと思っています。

Q 現在の国立大学、とりわけ工学部は個性がないといわれているが、最後に豊橋技科大のキャッチフレーズをひとつ。

A まだできてまもない大学で、粋なキャッチフレーズを持ちたくても持てないという状態でありますが、しいていえば、常に社会に対する問題意識を持って行動するというような技術者を理想とし、また私自身もそのような人間になりたいと思っています。どうぞ豊橋技科大をお忘れなく。

近　況　報　告

C8　藤　井　利　通

今春無事卒業して半年余り、仕事にも慣れ自分の持場を与えられ、頑張っているところです。

と言ってしまえば全て順調であったと思われるかもしれませんが、自分にとってこの半年間は、今まで過ごした2、3年に相当するくらい急テンポの毎日でした。

会社が、冷凍機、クーラー関係の企業を相手に断熱材、粘着材……等を扱う関係上、自社製品の名称、用途、材質、単価を覚えたり、注文を受けたら、品物を発送するまで色んな細かい過程を覚え、営業という仕事を通して自分の会社を知る事ができたように思います。

入社した頃は、工場勤務の予定でいましたが、営業にいきなりついたということで意外でした。しかし、その意図も週報を通して上司の意図も自分なりにつかみはじめています。そして、これからの自分についても、曲りなりにも意見をもち、目標というものが明確になってきているように感ずる昨今です。

全く暗い所で右も左もわからない時、無駄とも思えるような努力の連続かもしれないが、それでもへこたれないで一点の光明を見出すという前向きの姿勢を貫いていく、こういう人間が社会に信頼と信用という根をはり、最後には職場の勝利者になっていくように思えてなりません。

エミールという本の中に、「人と比較する前にまず、きのうの自分と比較せよ」という有名な一節があります。

この一節が今の自分をささえ、一切の出発点になっているように思えます。

明日からまた忙しい毎日が始まりますが、精一杯頑張っていきたいと思います。

〒410-03　沼津市植田33

近　況　報　告

M12　平　松　雅　彦

拝啓　M12期の皆さんお元気ですか。それから先輩諸氏の皆様方、初めてお手紙さし上げます。私はこのところ随分と忙しく息もつけないほどの毎日です。

ところで、私は幸か不幸か、皆様方の御推薦により、理事という大役を仰せ付かり、たいへん……をしていますが、そこでちよいとばかり、私の理事会での仕事振りを、拝見していただければ幸いです。

まず理事会は、このようにして始まります。

理事会開始時刻午後6時、「ああ、まだ誰も来てネェーヤ。」と会長の望月氏。そして2～3分後、遅れて入って来たのは事務長の小川氏。「きょうは金ちゃんにきつねうどん、えーとそれからカップヌードル。そんなところかな。」とダンボール箱を机の上におろす。そしてそれからさらに30分遅れまして、ちらりほらりと理事の方々、堂々と御出勤。もちろんその中には私も含まれております。そしてさらに遅れること30分、我沼津高専の大御所、白井・伊達両名の御登場。そしてこんなメンバーで約1時間遅れて理事会開始。しかしながら、会長の月並みな言葉で始まった理事会も、数分後にはワイワイガヤガヤと後はなるままでそんな結果、私の出番がやってくるわけです。

理事会は、本館2階の一般会議室でやっており、私の仕事としましては、トコトコと階段を下りて、宿直室のガスコンロのスイッチをひねることに始まります。そして待つこと10分、ヤカンの煮立つ音が聞えてから再び私は、もと来た階段をまた上って行くわけです。

そして、私がドアを開くか開かないうちに、いつの間に来ていたのか、消防の服をきた不審人物が、おっと失礼。そうではなくて、同じ会社の跡部大先輩が、猛然とヤカン目がけて、放水ではなくて、手元のインスタント食品に、給湯を始めたのです。そうです。この湯は、理事の方々の夕食用のお湯なのです。なんと言いましても今時計は8時を指しており、もうお腹がへってたまらない時間なのです。いくら理事の方々高給取りとは言え、この場合は、あの金ちゃんヌードルに目もないのです。そしてこの夕食への重要な掛け橋を作っているのが、お茶汲みならずお湯汲みの私なのです。

そして数分後、カップにお湯を入れるという重要な仕事が終ると同時に、理事会も終りを告げようとします。そしてまた会長の「次回は来週の火曜日です。」という月並な言葉で、理事会は完全に幕を閉じるのです。

今まで長々しく私の活躍振りを、拝見していただいて誠に光栄ですが、最後に一言。この物語はフィクションであり、登場人物その他は、一部架空なので存在いたしません。

敬　具

第16回東海地区高専大会報告

M2　仁　科　和　晴

第16回東海地区高専大会は、7月15日・16日に行なわれた。主管校は沼津高専であったが、昨年より各地区に分散して開催されることになり、沼津地区では陸上・剣道・硬式庭球・体操が行なわれた。今年は団体で13種目中2種目優勝したわけであり、5種目優勝の昨年の戦績を維持できなかった。これらの結果は次表に示すとうりである。なおラグビー、フットボールについては、11月23・25日岐阜高専グランドにて行なわれる予定である。

サッカーは昨年に続き2連勝であり、昨年のホームグランドでの勝利に対し、今年は岐阜高専のグランドにてのものである。5年間クラブを続ける学生が少い中、サッカー部の13名の5年生は優勝の原動力であり、初の全国大会優勝も夢でない。

水泳は4連勝であり総合得点としては、他を圧倒する強みがあった。1位を鳥羽・鈴鹿に奪われた種目もあったが、チームワークの勝利と長年顧問の渥美先生の献身的な力ぞえが大きい。

硬式テニスは昨年同様団体で2位となったが、個人戦でダブルス、シングルス共優勝した。

体操も2位であるが、個人戦は1～3位まで豊田に独占されており、1位との差は大きい。

バスケットボールも昨年の3位から2位と1歩前進、来年が期待される。

昨年優勝の卓球も2位となったが、個人戦ではダブルス2位、シングルス1位・2位であり、来年に期待したい。

尚昨年優勝の軟式庭球及びハンドボールは、今年は3位となった。

総体的にどの学校も決定的にレベルが異るわけではないが、5年生の人数は各校まちまちであり、一般的には5年が多い方が強い。優勝したサッカー部などはそのよい例であり、5年間同じクラブを続ける人が少い中では、5年が多いということだけでも大いに称えられる。

〒419-01　田方郡函南町柏谷17の1

総合成績表

種目＼順位			優勝	2位	3位
陸上競技			鈴鹿高専	豊田高専	岐阜高専
剣道	団体の部	全国大会予選	豊田高専	鈴鹿高専	沼津高専
		勝抜戦	鈴鹿高専	岐阜高専	鳥羽商船
	個人戦の部		伊藤（鈴鹿）	近藤（豊田）	今井（豊田）
硬式庭球	団体の部		豊田高専	沼津高専	鈴鹿高専
	個人の部	ダブルス	関戸・小林（沼）	葛山・一木（鈴）	小島・小林（豊）
		シングルス	関戸（沼津）	山田（豊田）	小林（沼津）
体操	団体の部		豊田高専	沼津高専	鈴鹿高専
	個人の部	床運動	森岡（豊田）	兵藤（豊田）	寺本（豊田）
		跳馬	寺本（豊田）	森岡（豊田）	兵藤（豊田）
バスケットボール			岐阜高専	沼津高専	
サッカー			沼津高専	鈴鹿高専	岐阜高専
水泳競技			沼津高専	鳥羽商船	豊田高専
軟式庭球	団体の部		豊田高専	岐阜高専	沼津高専
	個人の部		村上・西川（豊）	高須・山下（豊）	中野・伊藤（豊）
卓球	団体の部		豊田高専	沼津高専	鈴鹿高専
	個人の部	ダブルス	山下・小沢（豊）	吉田・辻田（沼）	北坂・木村（岐）
		シングルス	小楠（沼津）	吉田（沼津）	山下（豊田）
柔道	団体の部	全国大会予選	鈴鹿高専	鳥羽商船	沼津高専
		勝抜戦	鈴鹿高専	鳥羽商船	沼津高専
	個人戦の部	軽量級	田中（鳥羽）	中西（鳥羽）	
		中量級	池田（鈴鹿）	中井（鈴鹿）	
		重量級	山口(徹)（鳥羽）	伊藤（鈴鹿）	
バレーボール			岐阜高専	豊田高専	鈴鹿高専
硬式野球			豊田高専	鈴鹿高専	
ハンドボール			岐阜高専	鳥羽商船	沼津高専
ラグビー・フットボール					

同窓会理事親睦球技大会

8月20日（日）母校グランドを借りて、新入理事歓迎の球技大会を開催した。当日は晴天に恵まれ、第1部ソフトボールと第2部テニスが行なわれた。第2部なんて計画になかったが。

ソフトボールでは迷プレー続出。1期某氏は、打席に入るたびにホームラン、外野手を非常に疲れさせた。翌日は仕事にならないくらい疲れたと思う。某期○○さん来年の球技大会ではぜひ一塁まで行って下さい。

テニスでは、「テニスなんて」と言っていた人物が一番最後までコートから離れなかった。

次回は、人数が集まらなければ又は、野球部の好意が得られなければテニス大会にします。

尚出席は次の通り

1期　白井、伊達、跡部　　2期　仁科、神山
3期　望月　　5期　小川
6期　坂井、筒井　　12期　平松、藤井

最後になりましたが、三井先生、用具ありがとうございました。

田方郡函南町肥田 943
記M6　筒　井　正　文

慶　弔　報　告

"一番" 青木文男

M5　鞠　子　　誠

高専時代、常に出席番号"一番"を守り続けていた青木文男君（M5）が、S53. 1. 9　北アルプス穂高連峰において雪崩に遭い、雪の中で約半年間眠り続け、6.30梓川で発見され帰らぬ人となってしまいました。5年間机を並べた友として、彼と過ごした青春の1ページ――朝早く興津の在から電車に乗って通学し、眠気をこらえて勉学にいそしみ、またある時は、チー、ポン、ロンと活躍していた彼の姿、そして、あの"一番、青木君"、"は、はい"と5年間聞きなれた快よい声。――は、楽しい思い出として忘れることはないでしょう。

なにも出席番号が一番だからと弱冠27才の若さで御両親だけを残して亡くなるなんて、一なぜ、冬山なんかに一残念でなりません。

"山が命と笑ったあいつ
山を一番愛したあいつ
雪の穂高よ、こたえておくれ
おれに一言おしえておくれ
なんで吹雪にあいつは消えた"

青木文男君の冥福を祈ります。

告　知　板

名簿担当理事

今年度の名簿担当理事は下記の通り決定しました。勤務先・現住所に変更のあった時には必ず御連絡下さる様お願い致します。

M1	白井一夫	自宅	〒419—01　田方郡函南町間宮828	☎05597—8—2957
		勤務先	㈱東芝機械工作機械製造技術課	☎0559—21—5240　内線479
M1	伊達忠昭	自宅	〒419—01　田方郡函南町塚本445	☎05597—8—2769
		勤務先	コータキ㈱成形機械部	☎0559—86—5360
M1	島村俊	自宅	〒410　沼津市足高294—74　沼津鉄工団地内	☎0559—22—7791
		勤務先	㈱明電舎沼津事業所機器事業部生技課	☎0559—21—5111　内線562—4
M1	跡部恵一朗	自宅	〒410　沼津市大岡南小林3319—1	☎0559—21—1081
		勤務先	㈱電業社機械製作所第2設計課	☎0559—75—8221　内線254
M2	武田裕久	自宅	〒412　御殿場市二枚橋100—10	☎0550—3—6321
		勤務先	㈱電業社機械製作所第1設計課	☎0559—75—8221　内線254
M2	仁科和晴	自宅	〒419—01　田方郡函南町柏谷17の1	☎05597—8—3479
		勤務先	コータキ㈱成形機械部	☎0559—86—5360　内線264
M3	谷城高明	自宅	〒410—03　沼津市原743	☎0559—66—4761
		勤務先	㈱電業社機械製作所設計4課	☎0559—75—8221
M3	望月俊和	自宅	〒411　三島市清住町8—22	☎0559—72—7362
		勤務先	㈱東芝機械　第一設計課	☎0559—21—5240
M4	風間隆太郎	自宅	〒410　沼津市東沢田861—2	☎0559—21—8261
		勤務先	三菱アルミニウム	☎05599—2—1211
M5	鞠子誠	自宅	〒412　御殿場市中山544	☎0550—7—1046
		勤務先	㈱東芝機械化工機生産技術課	☎0559—21—5240　内線301
M6	筒井正文	自宅	〒419—01　田方郡函南町肥田	☎05597—8—2298
		勤務先	東洋金型㈱	☎0559—22—1543
M7	杉山高一	自宅	〒410—11　裾野市佐野931	☎05599—2—3293
		勤務先	国産電機㈱原料課設計係	☎0559—21—5930　内線293
M7	間野賢司	自宅	〒410—24　田方郡修善寺町修善寺627—1	☎0558—72—3786
		勤務先	㈱電業社第2設計課	☎0559—75—8221　内線253
M8	近藤博明	自宅	〒410—2　沼津市原西添1243—3	☎0559—67—2247
		勤務先	東洋電産開発室	☎0559—63—4567
M8	長倉雅秋	自宅	〒410　沼津市西間門401	☎0559—51—0449
		勤務先	㈱明電舎沼津事業所複合装置部	☎0559—21—5111　内線613
M9	小林勝	自宅	〒410　沼津市岡一色519—2	☎0559—21—3556
		勤務先	不二精機製造所㈱製造部設計課	☎0559—86—2480
M9	芹沢芳正	自宅	〒410—11　裾野市茶畑322	☎05599—2—0884
		勤務先	国産電機㈱電装設計一課	☎0559—21—5930
M10	稲村正則	自宅	〒410　沼津市大平567	☎0559—31—2733
		勤務先	㈱エイエイビー生産部焼付課	☎05597—8—5710
M10	原祐輔	自宅	〒410　沼津市旭町27—3	☎0559—63—9389
		勤務先	トヨタオート静岡　整備課	☎0559—62—9511
M11	中村栄治	自宅	〒430　浜松市寺島町15	☎0534—54—7194
		勤務先	㈱昌和製作所	☎今沢寮66—4980
M11	真野秀人	自宅	〒410　沼津市岡一色504—1	☎0559—21—5055
		勤務先	㈱コイケゴム生産技術課	☎0559—31—7181

M12	平松雅彦	自宅	〒410—03 沼津市原944—6	☎0559—66—3489	平松方
		勤務先	㈱電業社機械製作所第3設計課	☎0559—75—8221	内線255
M12	本郷雅樹	自宅	〒410 沼津市下香貫馬場519	☎0559—31—4133	
		勤務先	石原機械		
E1	鈴木恒男	自宅	〒410 沼津市下香貫島郷2667—1	☎0559—31—0282	
		勤務先	コータキ㈱制御機器部	☎0559—86—5360	
E2	神山始佳	自宅	〒410 沼津市大岡1005—11	☎0559—51—5473	
		勤務先	藤倉電線㈱施設課	☎0559—21—3111	内線420
E4	高橋徹	自宅	〒410—24 田方郡修善寺町283—1	☎0558—72—1179	
		勤務先	㈱明電舎沼津事業所プラント事業部発変電設計課	☎0559—21—5111	内線618
E5	小川吉晴	自宅	〒410 沼津市大岡上石田2646—1	☎0559—21—5887	
		勤務先	㈱明電舎変圧器工場技術一課	☎0559—21—5111	内線312
E5	水上重徳	自宅	〒421—33 庵原郡富士川町岩淵207	☎0545—86—0162	
		勤務先	東芝機械㈱電装課	☎0559—21—5240	内線358
E6	大城清	自宅	〒410—22 田方郡伊豆長岡町小坂918—2	☎05594—8—2885	
		勤務先	大東製機㈱	☎0559—71—2520	
E7	島本豊	自宅	〒417—02 富士市入山瀬661—2	☎0545—52—3680	
		勤務先	藤沢薬品㈱富士工場工務部動力課		
E8	長谷川親正	自宅	〒411 駿東郡清水町新宿269	☎0559—75—2072	
		勤務先	㈱明電舎	☎0559—21—5111	
E9	大沼義和	自宅	〒411 駿東郡長泉町竹原167—1	☎0559—71—9330	
		勤務先	明電舎㈱	☎0559—21—5111	
E9	諏訪部豊	自宅	〒410 沼津市井出117—8	☎0559—66—3041	
		勤務先	沖海洋エレクトロニクス	☎0559—23—2381	
E10	芹沢智志	自宅	〒420 静岡市平和町103—4	☎0542—71—7645	
		勤務先	㈱明電舎	☎0559—21—5111	
E10	大須賀顕二	自宅	〒410 沼津市大岡586—25 青葉寮		
		勤務先	富士ロビン㈱生産管理部生産技術課	☎0559—63—1111	
E11	小林亘	自宅	〒410 沼津市東熊堂695—7	☎0559—21—8171	
		勤務先	㈱東芝機械	☎0559—21—5240	
E11	杉山康延	自宅	〒410—03 沼津市井出1192	☎0559—66—2465	
		勤務先	㈱東洋電産	☎0559—63—4567	
E12	原田雅之	自宅	〒410 沼津市大岡下石田2764—1長田アパート内	☎0559—21—2944	長田方
		勤務先	サンエス電装	☎0559—63—3966	
E12	土屋信浩	自宅	〒410 沼津市三枚橋竹の岬 東芝機械南アパート	☎0559—21—8747	
		勤務先	東芝機械㈱制御技術課	☎0559—21—5240	内線279
C1	大沢幸一	自宅	〒410—12 裾野市須山38—2	☎05599—8—0022	
		勤務先	トヨタ自動車工業㈱	☎05599—7—2121	内線633
C2	中村誠一	自宅	〒410 沼津市大岡3873	☎0559—21—6988	
		勤務先	特種製紙㈱総合技術研究所	☎0559—86—1131	内線286
C3	納谷修	自宅	〒417 富士市伝法2—2507—2	☎0545—51—0308	
		勤務先	三島製紙㈱製造部	☎0545—52—4060	
C4	山田久義	自宅	〒410—21 田方郡韮山町内中154	☎05594—4—3809	
		勤務先	東洋醸造㈱	☎0558—76—2111	内線364
C5	塩川広	自宅	〒411 沼津市下香貫柿原2842	☎0559—31—9223	
		勤務先	東洋醸造㈱薬品検査課	☎0558—76—2111	内線316
C6	武保彦	自宅	〒412 御殿場市二枚橋138	☎0550—2—2573	
		勤務先	光洋産業㈱	☎0559—51—3153	
C6	渡辺雅樹	自宅	〒412 御殿場市中山508—1	☎0550—7—0291	
		勤務先	図書印刷		
C7	谷口栄一	自宅	〒410 沼津市今沢165	☎0559—66—4980	
		勤務先	㈱光洋産業	☎0559—51—3153	
C7	渡辺郁夫	自宅	〒410—11 裾野市佐野1228—5	☎05599—2—3897	
		勤務先	㈱コイケゴム		
C8	黒田昇	自宅	〒411 三島市緑町11—18	☎0559—72—1046	
		勤務先	㈱電業社機械製作所研究課	☎0559—75—8221	内線236
C8	藤井利道	自宅	〒410—03 沼津市植田33	☎0559—66—1196	
		勤務先	光洋産業㈱営業	☎0559—51—3153	

同窓会名簿の御案内

今年度の同窓会の事業として同窓会名簿の追補版を発行し、全会員に配布します。しかし、10周年記念同窓会名簿が現在でもかなりの部数が残っています。まだ入手されていない方には、一冊 1,000 円（送料込）で発送致しますので、事務局宛御申し込み下さい。

会費未納者へのお願い

みなさま、御存知のことと思いますが、同窓会運営資金としては、会員終身会費に頼るほかないのが実状です。現在財政が逼迫しておりこのままでは、近い将来、財政難に陥いるのが必至です。事務局といたしましても会誌等、刊行物発送の際に未納者に対し振替用紙を同封、お願いしているのですが、未だ未納者がいるのは残念です。同窓会のスムーズな運営のためにも未納者は至急納入して下さい。

編集後記

前号をスミからスミまで読み、かつ記憶力が飛び抜けて良い方はオヤッと思われたかも知れませんが。

前号で予告したテーマは「自分が高専卒であることについてどう思うか」でしたが、本号では海外出張や旅行の経験者による「海外の印象」を特集としました。本号は充分に楽しめる内容の会誌だと編集委員一同その出来栄えに満足しています。

テーマの変更については、おわびします。別の機会に取り上げたいと思いますが、その際には原稿の御協力をお願いします。

本誌の内容、あるいは今後の会誌発行についての御意見がございましたら、同窓会までお寄せください。

編集委員長　E2　神山始佳
編集副委員長　M11　真野秀人

同窓会誌　第8号

昭和53年10月30日　発行

発行責任者　望月俊和
発行所　沼津工業高等専門学校同窓会
〒410　沼津市大岡3600
TEL〈0559〉21—2700
郵便振替口座　東京2—102151

印刷所　ジャパンコミュニケーション
〒410　沼津市東熊堂650
マルトモVS3F
TEL〈0559〉23—0123